
きかんしゃトーマスとなかまたち ～Thomas The Tank Engine～

ソドー鉄道員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きかんしゃトーマスとなかまたち
ank Engine
Thomas The T

【Nコード】

N5091R

【作者名】

ソドー鉄道員

【あらすじ】

お馴染みの頑張り屋で悪戯好きなトーマスと個性豊かな仲間たちが、ソドー島を舞台に大活躍。

今日もソドー島の機関車たちはいつも大張りきり！

でも、今度の物語はまたトラブルが発生！、雪を押せない除雪車に、修理に出されたはずなのに放置された錆びだらけの女の子の機関車、ヒロの故郷で起きた爆発事故など・・・

トラブルがたくさん待ち受けていた。

でも、元気いっぱい
のトーマスや個性豊かな機関車
たちはそれにも
めげずに頑張って働くよ！

第1話：のろまなじょせつれっしゃ　　Slow Slow Train　　(前)

読者の皆さまへ

今回、初としてきかんしゃトーマスのお話を
書くことになりましたが、私は心から心配です。

もしも読者の皆様方が不快になるような

内容だったでしょうと心の底から思っていますが・・・

もし、皆さまが楽しんでいただければ私も心から
嬉しくなります。

トップハム・ハット卿が、

日本から輸入した除雪車を購入した模様です。

ところがこの除雪車は、

どうも貨車たちと同じく性格が悪いようですが、

どうやら、トーマスがその除雪車を

押すことになってしまいました。

また酷い目に遭うかもしれないのは、

きつとこの小説を読んでいる

皆さんもそう思っているかもしれません。

by ソード鉄道員

第1話：のろまなじょせつれっしゃ　　Slow Train

ソドー島は、さむい冬を迎えていた。

いつもより多めに雪が振り、駅の半分が埋まるほどの大雪になっていた。

しかし、機関車たちは、そんな雪の日でも雪かきを付けながら走るのだ。

雪かきを付けると、雪をかき分けながら進んでいくが、スピードが落ちてしまつて時間通りに駅に着かないこともあった。でも、雨の日や霧の日、どんな天気でも、機関車たちはそれにもめげずに働いてる。

しかし、この日、問題が起きてしまった。

トーマスの雪かきが、取り付け作業中に壊れてしまったのだ。

修理にはとても、時間がかかった。やがて作業員が、トーマスの機関士と助手に言った。

「この雪かきは直すのに三日はかかりますよ。申し訳ありませんが、三日間の間は雪かきを付けずに走るようになります」

「まいったな、トーマスに付ける雪かきはそれしかないから……前の奴はあの時に壊れて役に立たなくなつてるし……。」

機関士は、頭をひねりながら呟く、ずっと前にトーマスは、クリスマスのときにもう一つの雪かきを付けていた。

しかし、線路の上に大きな岩が転がっているのに気付かずにつけて壊れてしまい、もう使い物にならなくなっているのだ。

何とかならないのかと、機関士と助手は話したが……いくら話し合っ

でも、無駄だった。

ところが、当のトーマスは大喜びだ。

彼は、重くて窮屈で、古臭い雪かきを付けるのが大嫌いなのだ。

「やったぞ！こんな古臭いのを付けずに走れるなんて、楽しみだなあ！」

トーマスは、興奮した。

しかしエミリーは、心配だった。

「でも雪かきを付けないと走れないわ。柔らかい雪でも多くなれば機関車よりも強いなの？」

「へっ！、たかが三日間ぐらいつけなくなたって、十分に走れるぜっ！」

そう言うトーマスは、颯爽と、仕事に戻っていった。

「……何か、嫌な予感がするわ」

その日、トーマスは一日中嬉しそうに、自分の支線を突っ走った。多少の雪が線路の上にあっても、お構いなしだ。

時には、ちよつと大きい吹き溜まりがあつて止まっても、再スタートを思いっきり突進すれば、吹き溜まりはあつという間に吹っ飛んでしまう。

やがて、トーマスはフアークアー駅に着いた。

「多少の雪ぐらい、へっちゃらさ！。もう雪かきなんていらねえ！」

ところが、現実と言うものは、うまくいかない。

まもなく、トップハム・ハット卿が、

トーマスに知らせるために、ティッドマウス機関庫にやってきた。

「トーマス、今日のお前の働きぶりは良かったぞ。

しかし雪かきを付けずに走るのは危険にも程がある!、

だから明日から、新しい除雪車を押して走るように」

「……わかりました」

トーマスが返事をする、トップハム・ハット卿は帰って行った。

「チビのトーマスが除雪車を押しながら走るだど?、ハハハッ! こいつは傑作だぜ!」

ゴードンは、おかしくてゲラゲラ笑った。

でも、トーマスは、最悪だった。

雪かきよりも更に図体が大きくて扱いにくい除雪車を押すのだから。

次の日、トーマスはいつものように客車庫からアニーとクララベルを取って来ると、

ナップフォード駅に向かった。

プラットホームに入ると、トーマスは絶句した、

目の前には真っ黒で大きな車両が止まっているのだ。

その車両は、奇妙な形をしていて、後ろは客車と同じだが、

先頭は貨車の形をした前には除雪するための板がくっついていて、

その姿はまるで客車と貨車がくっついてる形になっていた。

除雪する板がちょっと丸っこい形になっている、

これは、パラボラ型と言う変わった除雪板である。

「あいつは一体誰だい?」

「紹介するよ、フラッペスだ。日本からやってきた新しい除雪車だよ」

機関士が、教えてくれた。

でも、トーマスはそんなに新しいとは思えなかった。

フラッペスは、トーマスを見ると偉そうに失礼なことを言った。

「おやあ？、君がこの最新式の僕を押す機関車かい？。」

最新式の僕もずいぶんと舐められたものだね、こんなチビに押されるとは」

トーマスはムツとした。大きな機関車たちにバカにされることもあるが、

除雪車にバカにされるのもっと嫌なのだ。

アニーとクララベルも、トーマスをバカにされてムツとした。

彼女たちも、フラッペスのことはあまり好きじゃないのだ。

そして、彼はフラッペスにゆっくりと近づき……連結をした。

乗客が全員乗って、車掌が笛を吹き、トーマスは車輪を全開に回して出発した。

フラッペスは、重たかった。

しかし……支線を走ってる最中、フラッペスの除雪板はあまりにも雪をかきわけていなかった。

と言うより、逆に雪の壁を作ってしまうほどの有様だ。除雪出来ない上に雪の壁と、

フラッペスの重さでトーマスのスピードは落ちるばかりだ。

フラッペスはそんなのは知らんぷり、その遅いのをいいことに、トーマスをバカにし続ける。

「おいおい、虫けら君。もっとスピードを出せないのかい？、これじゃあ日が暮れちゃうよ」

「……何だよ！、こっちは図体がでかい君を押してがんばってるんだぞ！？」

「ま、出来る事なら早く走ってほしいものだねえ。最新式の僕は、遅いのは嫌いだからさ♪」

この言葉にトーマスは段々、腹が立ってきた。

こんなことなら、あの雪かきを付けてた方が……マシだった。

蒸気を沢山出して、シュツシュツと懸命に走っても、遅れは中々取り戻せなかった…。

やっと、エルスブリッジ駅に着いた時には、トーマスはもうぐたぐたに疲れていた。

隣でヘンリーがイライラしながら、トーマスを待っていた。

「いつまで待たせるつもりなんだ！、おかげでこっちはだいぶ遅れちゃったじゃないか！」

「仕方ないだろ！？、除雪車を押してるんだから！、

それにこの除雪車はすごく重くておまけに雪の壁を作っちゃうし、だから遅れたんだよ！」

「ふんっ！それはお前がのろまだからだろ？。」

つまらん言い訳するんだったら、もっと早く到着しろよ！」

トーマスが言い返そうとした時には、ヘンリーは怒りながら出発してしまった。

トーマスはフラップスを睨んだけど、フラップスは相変わらずの知らんぷりだった。

水を補給すると、彼は再び、出発した。

トーマスは一生懸命、力任せでフラッペスを押しているも……やはり除雪できていない雪が邪魔で、全然スピードは上がらなかった。

またフラッペスが、トーマスをまたバカにした。

「あの大きな機関車の言うとおり、君にはのろまじゃないか？。

最新式である除雪車の僕をともに押せないんじゃない、機関車として終わってるね」

フラッペスの傲慢な態度には、トーマスは頭に來ていた。

アニーとクララベルも、とうとう怒りだす一方だ。

アニーが、クララベルにひそひそと話しかけた。

「何よ！自分が雪を除雪出来ないからってトーマスをバカにして！」
「トーマスをのろまとか虫けらとか、本当に失礼しちゃうわッ！」
「許せないわ！あのフラッペスという除雪車は！」

彼女たちは、フラッペスに仕返しをしてやりたいけど、トーマスに恥をかかせちゃいけない。

2人は、悔しくて仕方が無かった……しかし、そのチャンスは、とても早かった。

まもなく、終点のフアークアー駅に着くと、

トーマスは客車たちを待避線に置いて、フラッペスを押しながら、石切り場まで向かった。

石切り場に着くと、トーマスはフラッペスを押しながら石を積んだ貨車を牽いて、

港に向かった。ところが、そこでトラブルが起きた。

貨車たちはのろろと走るトーマスに退屈し、悪戯をしかけようと

企んでいた。

「今日は雪で線路が滑りやすくなってるぜ！」

「こんなのろまなやつにはちょうどいいスピードが出せそうだ……
！、けっけっけっ！」

貨車たちはクスクスと笑いながら、いたずらするチャンスを待ち構えていた。

だが、トーマスと機関士は、そんな彼らの話を聞いてなかった。

石切り場からの下り坂は、いつもは楽に走れるのだが、

今日は雪でコチコチに凍ってしまってるので、かなり注意しながら、走らなければならなかった。

まもなく、下り坂に差し掛かると……

機関士がブレーキをかけようとした。だが、それが貨車たちが待ち望んでいた時だ！。

「「「押せ押せ！押しまくれ！！」「」「」」

貨車たちはドスンドスン、ガチャガチャと音を立てながら、トーマスを思いっきり押した。

押されたトーマスは、猛スピードで坂を下って行った。

機関士が慌ててブレーキをかけようとするも、

線路がツルツル滑り、おまけにフラッペスの重さでブレーキがかけられない。

フラッペスも、スピードが速くなったのに気付き、あまりのスピードに怖くなって……

トーマスに大声で怒鳴った。

「虫けら君！、止まれ！止まってくれ！」

機関士が言った。

「だけどこのへこみ具合なら、雪をかきわけられそうだぞ？」

助手がそう答えると、機関士はへこんだ除雪板を眺めると、助手と話し合い、そして、トーマスに話した。

「どうやらこの事故で、以前より雪がかきわけれるようになった。フラッペスには可愛そうなことだが、トーマス、まだ走れるかい？」

「もちろんさ！」

トーマスは元気よく、そう答えた。

まもなく、ハーヴィーと作業員たちが残骸を片付け終わると、トーマスたちは再び、出発した。

機関士の言った通りだった。

除雪板がへこんだおかげで、雪がきれいにかきわけられるようになり、

始発のときまでは楽に走れるようになっていた。

フラッペスは、行く先々で、子供たちが指さしながら笑っているのが見えて、恥ずかしくなった。

でも、トーマスは早く走れるようになってすごくうれしかった。

ナップフォードの港に着いたときに、トビーがヘンリエッタを牽いて、待っていた。

トーマスはフラッペスを見ながら、トビーにこう話しかけた。

「やぁトビー、この黒い塊、何だと思う？」

トーマスの言葉に、トビーは答えた。

「君の新しい除雪車じゃない？」

「確かに、新しい除雪車そっくりだけどさ、本当に新しい除雪車だと思う？」

「どういことだい？」

「ほら、新しい除雪車は「最新式」なんだぜ？。こんなのもで壊れた貨車は「最新式」とは言えないじゃないかな？」

フラッペスは、恥ずかしくて何も答えなかった。

もう、この姿をさらされてしまつては自分を「最新式」とは言えなかった。

翌日……フラッペスは除雪出来ないことが明白して送り返され、

トーマスの雪かきは予定より早く直ったようだ。

もう二度と、自分を見下す嫌味なフラッペスは戻ってこなかったが……トーマスは違う。

どうやらまた……不機嫌のようだ。

「雪かきが直ったのに、嬉しくないの？」

「ちつとも嬉しくないよっ!!、

またこの重くて窮屈な雪かきを付けて走るなんて、僕は付けないまま走りたいのに!。」

嫌になっちゃうよっ!……まったく!」

「もう、わがままなんだから。」

でも、本当はトーマスも、ちょっとだけ雪かきの方が良かったと思っっているよ?。」

素直じゃないんだね、トーマス。

このお話の出演は……トーマス、エミリー、ゴードン、ハーヴェイ、ヘンリーそして、トビーでした。

第1話：のろまなじょせつれっしゃ (Slow Train) (後

いかがでしたか？。

ちよつと原作とテレビシリーズの設定を

鵜呑みにして書いてみましたか、

「ここらがなんかおかしい」

との部分がございましたらコメントをください。

皆さまの感想を楽しみにしております。

この事故の元ネタは、

北海道の富良野駅構内で起きた

本当にあった事故を基づいてかきました。

また、次回はどんな物語になるか、

それはまたのお話でお会い願うことを祈ります。

第2話：れっしやのなかのバーベキュー　　The Barbecue of

原作汽車のえほんを読んだ方々へ、

皆さまはちんまり鉄道と言う鉄道を覚えていますか？。

あの「小さな機関車たち」に登場したマイク、レックス、バートが、今度は面白い列車を牽くことになりました。

どんな列車なのか、それはこのお話で段々と分かってきます。

by ソード 鉄道員

第2話：れっしやのなかのバーベキュー　　The Barbecue of

ダックの支線の終点には、「ちんまり鉄道」と言う小さな鉄道がある。

そこで働く小さな機関車たちが、働いている。

彼らは、スカーロイたちよりも小さいけど……役に立つ機関車であることを証明している。

ある、春の日……ソドー島は暖かくて、景色も絶景だ。

でも、その日はとても、観光客が多かった。

ちんまり鉄道の客車にも、観光客がぎゅうぎゅうすし詰め状態になっている。

しかし、赤色の機関車マイクは違う……彼は客車が大っ嫌いなのだ。ある朝、機関庫で準備を整ってる間でも、マイクはぶつぶつ文句を言っている。

「あーあ、毎日毎日、客車を牽いて乗客を運ぶばかり……もう嫌になっちゃうよ！」

「まあまあ、せっかくお客さんが来てくれるんだからありがたいと思わないと」

文句を聞いていた緑色の機関車レックスは、マイクを嗜める。

だけど、マイクの機嫌は直らない。

「こんなことならジョックかフランクと交代して砂利を運びたかったよ！」

ジョックとフランクは今、乗客が多くて貨車を牽けない三台の代わりに、貨車を牽いて砂利を運ぶ仕事をしている。

マイクは貨車を牽きたかったが……ちんまり重役が決めたことによって、客車を牽くことになってしまいイライラしているのだ。

プラットホームでは、お客がわんさか、カメラを持って列車を待ち構えていた。

レックスがプラットホームにやってくると……お客たちは一斉に写真を撮り始めた。

パシャ！パシャ！パシャ！

あまりのカメラのフラッシュの眩しさにレックスは、目を瞑った。やがて機関士が、お客たちに注意した。

「すみませんが、カメラ撮影はもうそれぐらいにしてください！もうそろそろ出発しますよ」

「はあ……やっと終わった。眩しくて辛かった」

レックスは、ほっとした。

あのやせぎす牧師が書いた本が人気になって有名になったのは嬉しいが、こんなに撮影されるなんて、一度もない。

まもなく、レックスは汽笛を鳴らして、出発した。

汽車の長旅は、かなりの居心地だ。

客車から見える景色はいつ見ても、絶景物だ。

乗客たちは、上機嫌でぺちやくちやお喋りしたり、風景を写真で撮ったりもしている。

レックスも、上機嫌になった。いつも走りながら風景を見ているが……先ほどのことで風景の癒しのありがたみが、分かってきた。

走ってる途中の、森の中も素敵だし……綺麗に流れる川も、素敵だ。

段々、レックスは気持ちいい気分になってきた。

「なんだか落ち着くなあ……風も気持ちいいし、小鳥は囀ってる。お客さん達も喜んでもらってるし」

レックスは、さわやかな気分になっていた。

駅に着くと、乗客たちは一定の休憩時間で、ピクニックを始めた。乗客の中には、レックスとお喋りをし、珍しいお花を撮ってる人が居た。

子供たちも、綺麗な野原で走り回ったり、遊んだりもし……中には、お父さんとお母さんと一緒に、お弁当を食べている子も居る。

機関士と助手は、川で釣った魚を焼いて、魚とポテトのフライを作って食べていた。

帰る時間になり、レックスは蒸気を吐いた。

その時、一人の男の子が母親にこう言った。

「ねえママ、ピクニックも結構楽しかったけど、列車の中でバーベキューが出来たらいいな」

それを聞いたレックスは、笑うどころが半分、呆れかえっていった。

「列車でバーベキューなんかやったら、客車が火事になっちゃうじゃないか！」

彼は変な気分で、帰って行った。

その夜、機関庫でレックスは仲間たちに、今日の話を話した。

「お客の中にも変な事を考えるんだね」

マイクが言った。

「僕は列車でバーベキューをやったって、ちっとも楽しくないね」

バートも言う。

「……やっぱり君たちの言う通りなのかなあ」

次の日……レックスはジョックと交代で、砂利を運ぶ仕事から戻ってきた所だ。

丁度、大西部鉄道のダックがいつもの貨車じゃなく、平たい貨車を牽いて、やってきた。

彼が引っ張ってきた貨車の荷台には、小さな貨車が三台、乗っているのが見えた。

だけど、その貨車たちは汚くて錆びついていた。

「この貨車は使い物にならないって本土から譲ってもらったんだけど……」

「その汚さじゃ、こっちでも使い物にはなれませんか」

その時、レックスにいい考えが思いついた。

「……いえ、これは使い物になれるかもしれませんよ？」

彼は、機関士とダックに、自分の考えを披露した。

「この貨車三台をバーベキューの出来る客車に造り変えろと言うのはどうでしょう？」

そうすれば、お客さんも列車の中でバーベキューが出来て楽しさ

が出てくるんじゃないでしょうか？」

「そうか、その手があったか！」

早速、レックスの機関士はちんまり重役に話した。

ちんまり重役は、早々にOKを出した。

レックスの考えは、正しかった。

やがて、工場の扉が開き、バートが三台の貨車を工場から取り出すと……古い貨車たちがあつという間に、客車に大変わりとなっていたのだ。

二台の貨車は、バーベキューが出来るようにお肉や野菜を焼くプレートが付けており、三台目は食材を運ぶようになっていた。

レックスとバートとマイクは、びっくり仰天だ。

ちんまり重役がやってきて、レックスに話した。

「君の考えは素晴らしかったよ。このバーベキュー列車は春から夏の間まで君たちに牽いてもらおう」

機関車たちは嬉しくて汽笛を鳴らした。

でも、マイクは気に入らない様子だった。

しかし、その不機嫌は風と共に、消えて行った。

こうして、季節限定として「バーベキュー列車」が、開通した。

観光客は、列車の中でバーベキューをして不思議な気持ちだったが、ちんまり機関車たちが引っ張ってる間は楽しく肉や野菜を焼いて、食事を楽しんだ。

そして、はじめは客車に改造したバーベキュー列車を嫌々引いていたマイクだったが、貨車と同じ雰囲気だったので今は、上機嫌だ。

機関庫で、マイクはレックスに楽しそうに話しかけた。

「レックス！、君の考えは正しかったな！。このバーベキュー列車は最高だよ！」

「いや、僕の考えじゃないよ。この列車を牽けるのも、お客さんがバーベキュー出来るのも、あの男の子の言ったことのおかげだよ」

このお話の出演は、レックス、バート、ジョック、ダックそして……マイクでした。

第2話：れっしやのなかのバーベキュー ～The Barbecue of

いかがでしかでしょうか？

今回は汽車のえほんのを読んだ人ならば知っているちんまり鉄道の機関車たちを登場させてみました。

しかし、日本では彼らの活躍は一卷だけなのでキャラのつかみ方が分かりませんでした：不快感がございましたら申し訳ございません。客車嫌いのマイクも、このお話で客が嫌いじゃなくなったとは言い聞けません：それは私本人も分かりません。

このバーベキュー列車の元ネタはJR北海道のイベント限定として走る「トロツコ列車」「ノロツコ号」こと「バーベキューカー」を基づいてかきました。

質問と感想、そして「あの鉄道のキャラをお話に出してください！」や「この鉄道で起きた事件を元にして書いてください」など等のリクエストをお待ちしております。

フラッペスとバーベキュー列車の紹介、リクエスト募集（前書き）

今回はお話ではなく、物語に登場した。

私が考えたオリジナルキャラクターのご紹介です。

フラッペスとバーベキュー列車の紹介、リクエスト募集

読者の皆さま・・・

この度、「きかんしゃトーマスとなかまたち」(Thomas the tank Engine)をいつもご愛読ありがとうございます。

嬉しいことに、皆さまのおかげにより、この小説も早くもPV200アクセスを突破いたしました！。

こんなに嬉しいことはありません、本当にありがとうございます！

今回は、お話ではなく、小説内に登場した。

オリジナルキャラクターのご紹介をさせていただきます。

脳内声優があるのは、オリキャラの性格をイメージして書いたものです・・・。

どうかそこらへんを御了承願います。

名前…フラッペス (Frappes)

車両種類…パラボラ形除雪車

出身鉄道…日本国有鉄道

性別…男

一人称…僕

カラーリング…黒と緑のストライプ

モデル…キ273

脳内声優…子安武人

名前の由来…マリオカート64の「フラップスノーランド」の「フラップス」から

性格…

嫌味でヘタレなナルシスト。

自分を「最新式」だと思い込み、自分を押しやる機関車を見下しては怒らせる。

除雪出来ないがために、多くの列車は時間に遅れるが、全てを自分を押しやる機関車に責任を押しつけるなどの卑劣な行為も見出す。
更には機関車そのものを「ゴミ」か「玩具」としか見ていない。

運用…支線や本線などでの除雪担当

お話の元ネタ…

2009年の北海道富良野市のJR富良野駅で起きた除雪車衝突事故が元。

説明…

トーマスの雪かきが修理の間にトップハム・ハット卿が購入した日本の最新式の除雪車。

自称最新式だが、トーマスは外見をみただけで彼を最新式ではないことを見抜いていた。

しかし、実際は除雪板が除雪抵抗を減らしているのが原因で雪を除雪出来なく、逆に雪の壁を作ってしまうほどの有様。

そしてかなり重たくて、大型機関車で押さないと時間がかかる。自分を押すトーマスに向けて「虫けら」と呼んで見下すも……。石を積んだ貨車たちのいたずらで、その重たさが逆行し、トリレック駅に止まっていた貨車と正面衝突を起こしてしまう。だが、それが好都合で逆に雪をかき分けるようになったものの……。除雪出来ないのが明白し、日本国鉄に送り返された。その後の彼の消息は不明。

名前…バーベキュー列車 (Arlesdale Barbecue Train)

車両種類…元貨車↓客車

出身鉄道…イングランドの鉄道

カラーリング…橙と黄色と肉を焼いている絵。ボディ側「ARLES DALE BARBECUE TRAIN」

モデル…レーブングラス・アンド・エスクデール鉄道の貨車

お話の元ネタ…

北海道を走る北海道旅客鉄道の「バーベキューカー」が元。

運用…春から夏までのバーベキュー運行

説明…

レックス、マイク、バートと同じくイングランドから廃止された鉄道にあった3台の貨車。

3台の機関車がソー鉄道に行ってしまったため、何年も廃線となった引き込み線に放置されていたが……

トップハム・ハット卿が本土から譲り受け、ちんまり鉄道に運んで行ったものの、老朽化によって3台共々、かなり錆びついていた……しかし、レックスの提案によって客車に改造され、更にはバーベキューが出来ると言う特別製の客車に生まれ変わった。

それ以降は、春から夏までの「バーベキュー列車」が開通され、ちんまり鉄道の名物となる。

現在では客車だが、貨車の雰囲気が残っていたので、あの客車嫌いのマイクでさえもお気に入りとなっている。

2台の客車はお客の他に、肉と野菜を焼くプレートが設置されている。

3台目の客車は他の2台と異なり、お客のほかにバーベキュー用の食材や、緊急時の為の消火用のバケツを乗せることができる。

以上で、オリキャラのご紹介を終了します。

本来ならば、10話ぐらいで紹介していく予定でしたが……私の気力やネタ探したとかなり時間がかかりそうになってしまったので、速くも紹介せざるおえませんでした。

今現在、お話を書くのに息詰まっています……

次話を投稿するのに何日もかかってしまい、楽しみにしている方を裏切るような行いをしてしまい、申し訳ございませんでした。

そこで……

感想欄やメッセージにて「●●のお話を書いてください」や「この事件を元を書いてください」

などのリクエストを募集しております。

募集内容は

？あのキャラクターの主役のお話

？実際にあった鉄道の事件と事故（ただし最近の事件と事故は除外）

……の、三つの募集内容にしています。

一言で言うのなら、ネタ切れ状態になっています。

最後になりますが、質問や感想、アドバイスもお待ちしております。
ご愛読、ありがとうございます

フラッペスとバーベキュー列車の紹介、リクエスト募集（後書き）

ジェームス

「オイ！ぐずぐずしないで僕の話を書いてくれよ！、

みんなにこの赤いボディが綺麗な僕の活躍を見せたいからさ！」

私に（以下略）

「…じゃあ、あのお話を書いてもいい？」

ジェームス

「あ、あの事を書くのはやめてくれ〜〜！（泣）」

次回、「ジェームスのとびおりみすい」James Jumps

off It」をお楽しみに。

第3話：ジェームスのとびおりみすい James Jumps off

ウィルバート・オードリー牧師様へ、

貴方が生み出した5号機機関車ジェームスは、どうも私を困らせてしまいました。

彼が「僕の話を出せ！作れ！」とぶーぶーうるさく文句を言っていました。

ですので、今回の話を書こうとしたときに：彼の顔はすごく青くなりました。

多分、今回で彼は2度と文句を言わなくなると思います：多分ですが、ね？

b y ソード 鉄道員

赤いボデイが自慢のジェームスは毎日：自分がソドー島で美しい機関車だと、思いこんでいる。

そのおかげで、他の機関車たちはうんざりするほど自慢話を聞かされるのだ。

「僕はこの鉄道で一番美しいし気品がある！、そしてトップハム・ハット卿が役に立つと認められるほどの素晴らしい機関車なんだぜ！！」

「ふんっ！、たかが赤いだけで気品があるとは言えないね、それにお前は美しくも気品と言うけど……お前の赤色はアホの色なんだよ」
「ただの貨車用機関車の分際で、素晴らしいだあ？……一番素晴らしいのは俺の方だってことを忘れるな」

「…へーんだ！。ださい緑色と青色したデブな君達に、この赤いボデイの悪口を言われたくないね！！」

ヘンリーとゴードンは頭に来て、ジェームスに言い返そうとした。
しかし、ジェームスは2台に蒸気を吹きかけて、逃げ出した。

「ふんっ！生意気なジェームスめ！」

「今に見てろよ！」

ウェルズワース駅の操車場で、ジェームスは貨車たちに八つ当たりしていた。

最初は、貨車を押す仕事が嫌だったが……ストレスの解消になるので、今は楽しそうに貨車を乱暴にぶつける。

貨車をガツン！ガツン！と思いつきりぶつけ、思いつきり押したりもした。

乱暴に貨車を扱ってしまうと決まって、貨車たちは怒る。

そのせいで他の機関車が連中の餌食となってしまうのだった。

でも、ジェームスはそんなことをすっかり忘れていた。

「オラァ！さっさと行けよ！汚く汚れるのがお前たちの仕事だろ！？」

「うわあああ！？」

そこへ、エドワードが、貨車を戻しにやってきた。

「そんなに貨車たちを乱暴に扱っちゃダメだよ」

「僕は君と同じで貨車の扱いが慣れてるから平気さ☆。だって僕は素晴らしい機関車なんだぜ？」

彼は偉そうに言う。

しかし、エドワードは気が気じゃない。

本当に素晴らしい機関車は、貨車たちを怒らせるようなやり方をしちゃいけないのだ。

昼ごろになると、ジェームスは空っぽの貨車を待避線に入れていると、トップハム・ハット卿がやってきた。

「昨日の豪雨によって、鉄橋がだいぶ老朽化となっている。そこで復旧作業に取り掛かるから、貨車を牽いて、橋の修理に使う材料を運んでくれ」

「ええ！？、また貨車を牽くんですか？。どうせならヘンリーかマードックにしてくださいよ！、あいつらは力持ちだし…」

「本当に役に立つ機関車はどんな仕事でも一生懸命働くものだぞ！」

ジェームスは渋々、命令に従った。

ブレンダムの港に着くと、また天気が崩れてきた。

ジェームスが貨車を克蘭キーの所まで連れて行く、そこで克蘭キーは身長に、鉄橋に使う材料を貨車に積む。

悪天候な為、彼のチェーンは風でゆらゆらする。おまけに雨も強い。

「今日はこの天気だ、線路が滑りやすくなってるから、気をつけて走れよ」

克蘭キーが注意した。

でも、ジェームスの耳には入らない。

彼は早くこの仕事を終わらしたくてうずうずしてるのだ。

その時、トーマスとパーシーが倉庫から燃料を持ってきていた。

パーシーは、イライラしてるジェームスが気になって、何故そんなにイライラしてるのかと問いかけた。

「どうしてそんなに急いでいるの？」

「そりゃあ僕は素晴らしい機関車だからさ！、僕はこの仕事を早く終わらせることもできるし、貨車の扱いも十分なんだぜ？」

「へえ？、その素晴らしい機関車がそんなにイライラしてちゃ、きつと素晴らしくない機関車になるよ。二度あることは三度あると言うしね」

トーマスがクスクス笑うと、ジェームスは顔を真っ赤にして怒った。パーシーは、ちんぷんかんぷん。

「ねえ、「喉あるところにご飯ある」ってどういう意味？」

「二度ある事は三度ある。つまり二度も起きた事がもう一度起きるって意味だよ」

「ふんっ！くだらん！！」

作業員が、貨車に乗った材料を落とさないように点検を終えると、ジェームスは思いつきり貨車たちを引っ張った。貨車たちはキィキィ悲鳴を上げながらついてくる。

「貨車たちにまたいたずらされないように気を付けろよ？」

トーマスがまた、ジェームスに発破をかける。

彼の顔は、リングのように真っ赤っかだ。

一方、鉄橋のところでは、作業員たちが一生懸命に修理を行っている。

ここは一昔前、ゴードンとヘンリーがブルーベルと言う牛によって立ち往生してしまった橋だ。

でも…最近では錆びが付き始めて、古くなっていた。

錆びが付き始めたころは、まだ大型機関車が渡れていたのだ。しかし、次第にトーマス達のようなタンク機関車しか渡れない状況になり……そしてタンク機関車でさえも渡れなくなってしまい…

乗客を列車から下ろして、徒歩で渡らせることになってしまいう有様だった。

ところが、豪雨によって以前より錆びがつき、今にも崩れ落ちそうな状態にまで達した。

そこでトップ・ハム・ハット卿は、一反、本線の列車を運行停止して、橋の工事を進めた。

作業員達が、鉄橋の骨組みを点検する、ジェームスが材料を持ってくるまで、修理ができない。

……その時だ！、最悪な事態になってしまったのだ！。

「橋の様子がおかしいぞ！！」

作業員の一人が叫んだ。

すると次第に、橋が軋む音を立て始め……骨組みの一部がバキッとひびが入った！。

鉄橋が段々、グラグラと揺れ始める。

「みんな鉄橋から離れろ！！崩れるぞお！！」

作業長が大声で言った。

みんなは一斉に橋から離れた。

陸橋から離れた瞬間……陸橋の中心が曲がって、火花を飛び散らせる。とうとう、陸橋は真っ二つに崩れた。

無事に残った線路はむき出しの状態だ。

その頃ジェームスは、そんなことも知らないでぷりぷりしながら走ってきた。

作業員は、ジェームスが走ってくるのに気づき、急いで赤旗を振った。

機関士が、赤旗を目撃してブレーキをかけた。

ところが、今朝ジェームスに乱暴な扱いをされた貨車たちがぐいぐい押すのと、雨のせいでレールが滑りやすいせいで……ジェームスは通行止めの看板を突っ切ってしまった！。

ギギギギイイイーツツツ！！ ガシャーン！ バツシャーン！

看板を突っ切ったジェームスは、目をつむったままだ。やがて、ジェームスは眼をそっと開けると……辺りは冷たい川の水だ。

車輪は線路から外れ、そのままさかさまに川に落ちてしまったのだ。

まるで、ジェームスが橋から飛び降りた感じだった。

幸い、怪我人も無く……橋の材料を積んだ貨車たちも、炭水車と共に無事だった。

でも、ジェームスは泥だらけになってしまった。こんな汚い姿になってしまつては……もう素晴らしい機関車とはいえなかった。

「ううう……僕の赤いボディが泥だらけだ。こんなのゴードンたちに見られたら笑われちゃうよ！」

彼はそう言ったが、予感的中。すぐに、クレーン車を押してきたベアーがやってきた。

そしてその後から、ヘンリーがやってきて、全てを見てしまったのだ。

やがてヘンリーは、貨車たちを後ろから引っ張っていった。…ジェームスの炭水車と一緒にね。

やっと、ジェームスは助け出された。

そこへ、トップハム・ハット卿がやってきた。彼はカンツカンに怒って、ジェームスに怒鳴った。

「ワシは「橋の材料を運べ」とは言ったが誰も「橋から飛び降りて水浴びをしろ」とは言っとらんぞ!!」

「はい、すみませんでした……」

「修理工場の話だと、今のところ赤いペンキは不足しているようだ。しばらくの間は、別の色で我慢するんだな!」

トップハム・ハット卿に言われると、ジェームスは何も言えなかった……。

彼のボディーに降り注ぐ雨は、まるでその汚い姿を嘲笑っているように思えた。

あの時、クランキーとトーマスの話をちゃんと聞いていれば、こんなことにはならなかったはずだ。

……翌日、修理を終えたジェームスは、真っ先にティッドマウス機関庫に戻ってきた。

機関車たちは、ジェームスを見て仰天した。

なんと、彼のボディーはあの自慢の赤いボディじゃ無く……昔の真っ黒なボディになっていたのだ!。

ゴードンとヘンリーは、そんなジェームスを見て、おかしく笑い、ジェームスをからかった。

「これはこれはジェームス君！、いつもの赤いボディはどうしたんだ？（笑）」

「きつと赤が嫌だから、別の色に振り替えたんじゃない？。これじゃあ、素晴らしい機関車とは言えないね？（笑）」

ジェームスは、何も答えなかった。

やがてトーマスが、口を開いた。

「これでわかっただろ？、「二度あることは三度ある」って！」

「……ふんっ！！」

そしてその夜。ゴードンとヘンリーはまだ、ジェームスの今回の事故のことを言っでは、昔のジェームスの事故の話をして、大笑いした。

靴ひものこと、タール運搬車にぶつかったこと…そして、蜂に刺されたことなどの話ばかりなので、ジェームスはその日、顔をムスツとしながら、一日を過ごしたのだった。

でも、そのゴードンもまさか、自分が真っ黒のボディになると言うことは、まだ分からなかった。

その話は、この次にしよう。

このお話の出演は…トーマス、ゴードン、エドワード、パーシー、ヘンリー、クランキーそして…ジェームスでした。

いかがでしたでしょうか？。

しばらくの間の更新を止まってしまう、そして今回のお話はグダグダとなっていました。

今後からは、実際に起きた事故を基づくのではなく、現実的な事故のオリジナルを考えて書いていきます。

今回のお話の元ネタは静岡鉄道駿遠線で起きた話を基づいてかきました。

尚、この元ネタは大井川鉄道ではお馴染みのあの橋の事件です。

実際に乗客を列車から下ろして、徒歩で橋を渡らせたという話があります。

そして今回のお話にはありませんでしたが、この橋の乗客を渡らせた後に：人力客車などと言う車両が存在しました。

現在では、そんなことをさせるのは考えられませんね？。

次回は、「まっくら ゴードン The black Gor
don」です。次回もどうぞお楽しみくださいませ。

リクエストもどしどし募集しております。

第4話：まっくろゴードン (The black Gordon) (前書き)

読者の皆様へ。

ついに今年でゴードンの兄弟機関車のフライング・スコッツマンがレストアから復帰しました。

そこでトップハム・ハット卿は、ヨーク鉄道博物館長と話し合ってゴードンが驚く塗装を始めました。

最初はゴードンも「俺はあんな色にされるのは嫌嫌だったさ、だけど今じゃ慣れてるぜ」と威張っていました。

実はフライング・スコッツマンもゴードンと同じ色になっています。

……

by ソード 鉄道員

第4話：まっくらゴードン (The black Gordon)

ある晩のことだ、ジェームスは、今日も不機嫌だ。

この前の雨の日に、橋から飛び降りてしまつて泥んこに汚れてしまい……更には、自慢の赤いボディから黒いボディに塗り替えられてしまつていのだ。

おかげでゴードン達からはいつも昔の事故のことを言われては、からかわれる。

「でっへっへっへっ。そういえばこんなこともあつたな、客車を壊してお客の靴紐で直した機関車が……」

ゴードンが、靴ひも事件の話をして、ジェームスを見た。
ジェームスは、ずっと口を瞑つたままだ。

「それに、トビーをバカにしてたら自分がタール運搬車と衝突して、汚くなったバカな機関車も居たっけ？」

ヘンリーも、タール運搬車と衝突した事故の話を言つては、ジェームスをジロジロ見る。

ジェームスは悔しくて悔しくて、たまらなかつた。

「ふんっ！……ヘンリーだって下塗りのまま走らされてたじゃないか！、それにゴードンも黒くなるに決まつてるだろ！」

「俺が黒くなるだア？、プッハア！。俺のような立派な機関車が真っ黒になるときなんか一度もないぜ！。

いいかア？、俺はグレスリー卿に造られてからは兄弟のスコツツマンと同じように緑色のボディだった。

ハット卿の鉄道に入つた時にはクルー工場で今のような青いボデ

イとなっても、俺のみたいなかったいい機関車は一台も居ない！

第一、俺のような立派な機関車が黒いボディにでもなってみろ！、あつという間に貧相な機関車に変わっちゃう。

……つまりだ！、トップハム・ハット卿がこの俺様を青色にしたのも、黒いボディにしなかったのも……俺が特別な機関車だからだ！。

黒いボディの機関車は、下品だからな」

ゴードンはそう言うが、実は彼の兄弟フライング・スコッツマンも、あの恐ろしい第二次世界大戦の時に黒いボディになっていた時期があった。

それに、黒いボディの機関車はいっぱい居るのだが……威張り屋のゴードンはすっかり忘れていた。

その頃、トップハム・ハット卿は電話をしていた。

彼はある人と話し合っていた。

「では、明日の昼ごろにお待ちしております。
ゴードンが聞いたら大層喜びますので……」

次の日、トップハム・ハット卿は、ティッドマウス機関庫にやってきた。

機関車たちに重大なニュースを、発表した

「あー、機関車の諸君！。

フライング・スコッツマンが修理を終えて、ヨーク国立鉄道博物

館からソドー鉄道に遊びに来ることになった。

そこで、彼の復帰を祝うパーティーをグレートウォータトン駅で行う。諸君らの腕の見せ所だ！」

「「「「「分かりました！！」「」「」「」

機関車たちは元気よく返事をした。

特にゴードンはとても、興奮していて、すごく喜んでいた。

炭水車が2台付いているのが特徴の機関車でもあるフライング・スコツツマンは、ゴードンにとっては数少ない、大切な家族の一人だからね。

「ゴードン、今回のパーティーはお前が主役となる。

クロヴァンズ・ゲート整備工場に行き、ボディの色を塗り替えてもらいなさい、塗装が終わったら連絡駅でスコツツマンが来るまで待機しているんだぞ」

ゴードンは嬉しくて煙突まで笑っていた。

機関車たちは大張り切りだ。

エドワードは、エミリーと一緒に作業員を乗せ、アーサーとヘンリーは、チョコレート工場からチョコを運ぶ。

大きな機関車や、小さな機関車たちも、パーティーに使う物資と乗客を乗せて働いた。

そしてゴードンは、塗装してもらうために真っ先に、クロヴァンズ・ゲート整備工場に向けて突っ走った。

……クロヴァンズ・ゲート整備工場に着くと、作業員たちがゴードンが来るのを待っていた。

ゴードンは早く塗り替えてもらいたくて、ウズウズしている。

「早くしてくれよ！兄弟が来ちまうじゃないか！」

ゴードンは、せかした。

でも、機関士がゴードンを嗜める。

「落ちつけよゴードン！、そんなに慌てなくてもスコツツマンの到着する時間にはちゃんと間に合う」

早速、作業員たちがゴードンのボディの色を剥がし、さび止めの下塗りを開始した。

ゴードンはウキウキしていた。

「俺のボディはいつものように青色か？、それともフライング・スコツツマンと同じダークグリーンか？」

ゴードンの機関士は、彼の塗装が終わるまで、ココアを飲んでいた。

まもなく下塗りが終わると、今度は黒色のペンキを持ってきた、それをゴードンのボディや機関室、車輪と炭水車に塗り始めたのだ。

ところが、ゴードンはそんなことも知らずにうとうと眠ってしまう。

やがて塗装が仕上がった。

機関士がゴードンを叩き起こした。

「起きろよ！ゴードン！。塗装はもう終わったぞ？」

「んゝあゝ？…あーもう終わったのか？」

「もうとつくにね、さあ連絡駅に行くぞ」

機関士がスチームを入れると、ゴードンはゆっくりとバックして
転車台に乗って、方向転換をした。

自分のボディがどうなってるのか、彼はゆっくりと自分のボディ
を見てしまい、あまりに絶句した！。

なんと！ボディや炭水車全体が真っ黒ではないか！、ジェームス
の黒いボディよりも黒一色だ。

青色でも、ダークグリーンでもない……自分が下品だと言い張っ
てた黒色なのだった。

ゴードンは腹を立てた。

「あゝあゝ？、何だこの色は！？俺はこんな色にしろとは頼んで
ないぞ！？」

「ハハハハッ、お前が怒るのは無理ないが、今回はこの色で走って
もらうぞ」

「ふんっ！冗談じゃないぜ！。今すぐ元の色に戻してくれよ！」

「だめだ。これはトップハム・ハット卿の命令なんぞで、多少バカ
にされても気にしないだろ」

「わぁ見て見て！新しい大型機関車だ！」

連絡駅でゴードンの姿を見て子供たちが叫んだ。

「……って、なあんだゴードンが黒くなっただけか」

「えっ!? これゴードンなの!?。あははっ! 変な格好! これじゃあ黒焦げになった機関車だ!」

彼を見て子供たちは大笑いしながらからかった。

乗客たちも、ゴードンを指さしてゲラゲラ笑った。

ゴードンは、面白くもなんともない。

「……何でトップハム・ハット卿は、この俺を黒くしちまったんだ?」

彼はぶつぶつ言いながら、フライング・スコツツマンが来るのを待っていた。

…しかし、いつまで待っても、フライング・スコツツマンは来なかった。

他の機関車は、横切る際にゴードンを見ては、クスクスと笑っていく。

パーシーも、彼の姿を見てからかう。

「黒こげ機関車! 急げ急げーい!」

パーシーはそう言って過ぎ去っていく。

ゴードンの怒りはだんだん、頂点まで達していた。

「ふんっ! 生意気なチビ機関車め……!」

それでも、ゴードンはフライング・スコツツマンには怒らなかった。

ゴードンの機関士が、駅長に話をしに行こうとした……その時、その駅長が悪い知らせを持ってきた。

「フライング・スコッツマンがヘンリーのトンネルで立ち往生してしまった！。救援に行ってくれ！」

「急ごうゴードン！！」

ゴードンはシューとたくさんの蒸気を出して、ヘンリーのトンネルへ駆けつけた。

彼は、自分のボディの色のことなど、どうでもよかった。

ゴードンは、急行と同じ速度で走る、本当にすっ飛ばような早さだ。

ヘンリーのトンネルで、フライング・スコッツマンが立ち往生していた。

どうやら、水をあまり補給できていなかったので、水が切れてしまったのだ。

「参ったなあ……ゴードンや他の機関車たちと久々に会えると言うのに……申し訳が立たないよ……」

フライング・スコッツマンは、罪悪感を感じた。

自分の復帰を長い間待ってくれてるソドー島のみんながどんなにがっかりするのか……考えてしまう。

その時だ、彼は聞き覚えのある汽笛を耳にした。

POOO! POOO! POOO! POOO!

機関士が急いで、赤旗を振る。

フライング・スコツツマンは汽笛の音を聞きながら、誰がやってきたか見当がついた。

「やっぱりゴードン、君か！久しぶりだな……けど、その色……」
「色のことなんざどうだっていいぜ。それよりお前さんを助けるのが先だ」

黒い大きな機関車が、フライング・スコツツマンと連結した。

ゴードンは汽笛を鳴らすと、フライング・スコツツマンを引っ張り出した。

すると、トンネルから出てきたフライング・スコツツマンはあの緑色のボディではなく、ゴードンと同じように黒いボディになっているじゃないか！。

ゴードンは、びっくり仰天だ！。

フライング・スコツツマンは申し訳なさそうにゴードンに謝った。

「ごめん、僕がこんな色になってしまったから、君に迷惑をかけてしまっ……」

彼は思い切って謝った、プライドの高いゴードンは許してもらうはずが無い。

でも、ゴードンは怒らなかった、怒るより逆に優しい笑顔でこう言った。

「なあに、俺たちたった2台しかない兄弟じゃねえか！。弟が

黒いボディになってて兄である俺も黒くなくちゃいけねえだろ？」

フライング・スコッツマンの目には、ちよつと涙が出ていた。

さあ、2台の機関車が……グレート・ウォータトンに向けて、シュッシュと走り出した。

ゴードンとフライング・スコッツマンが、滑りこむようにプラットフォームに入ってきた。

機関車たちは、彼らの姿を見てびっくりしていた。でも、エミリーとエドワード、トビーは違った。

「とても似合うわ、2人とも」

「好きでこんな色になったわけじゃない！」

「君たちはどんな色でもぴったりだよ」

まもなくして、トップハム・ハット卿が、ジェームスに乗ってやってきた。

ジェームスは、あの黒色じゃなくなって元の赤色に戻っていた。

トップハム・ハット卿が、ゴードンに話しかけた。

「すまないゴードン。お前が怒るのも無理ないが、実はこれはワシと館長が考えてた事なんだ」

「俺ならまだしも、何故フライング・スコッツマンまでですか？」

「彼がそう望んだのだからだよ。お前は知らなかったのだが……あれはお前が今の姿になった頃だ。その時はあの戦争が始まって、フライング・スコッツマンは黒く塗り替える必要があったんだ。」

綺麗な色をした機関車は当時、狙われやすかったのな」

ゴードンは、思い出した。

彼はソドー鉄道にずっと住んでいて、戦争には参加していなかったからだ。

代わりにフライング・スコツツマンや彼の兄弟たちも黒いボディで、戦争の最中に人々や軍の荷物を乗せて、走り続けたのだ。

次に、館長が話した。

「それに、君とスコツツマンは世界に2台しかない機関車なんだ。私はトップハム・ハット卿と話合って、スコツツマンを黒くするなら君も黒くさせようよね。

今の君たちの色は戦争の色じゃなく、君とスコツツマンの再会を記念とした色でもあり、絆の色でもあるんだ」

夜、グレート・ウォータトン駅は、盛大なパーティーが行われた。子供たちは、フライング・スコツツマンに乗って記念撮影を行ったり……ゴードンの機関車を覗いたりもした。

他の機関車たちも、フライング・スコツツマンとお喋りをした。中でも、彼がロンドンからエディンバラ間を走った話をみんなわくわくしながら聞いていた。

ブラスバンドのメンバーが奏でる音楽も、心地よく……とっても、楽しいパーティーだった。

……だけど、そうでない機関車が一台居た。

ゴードンは、全然パーティーを楽しむ気もない。

彼は、ジェームスに言ったあの事を思い出して、自分が恥ずかしくなっ、情けなくなっていた。

その夜、機関庫でゴードンは、フライング・スコッツマンとジェームスと一緒に休んでいた。

それでも、ゴードンはしょぼんとしていた。

フライング・スコッツマンは、心配してゴードンの話し相手になった。

「俺は情けない機関車だ。」

昨日の夜にジェームスをからかってあんなことを言っちゃもうなんてよ……

黒いボディの機関車が下品だなんて、そんなことを言ったらお前さんまでも下品と言うことなんだ。

今考えると、黒い機関車はたくさんいるもんなあ、……俺は本当に立派でも偉くもない機関車だな……」

「そう落ち込むなよ！ゴードン。確かに君の言ったことは間違ってるし威張ってばかりだけど……僕やここの鉄道のみんなはそう思っていないよ。」

最初の頃、僕も君と同じ黒いボディは嫌々だったさ、でもあの頃はそうは言ってはいられない時期だったからね。

それに僕に比べたら、君は本当に立派で偉い機関車だよ。

僕は知っている……いや、君たちが出てくる絵本やテレビを見た人たちもみんな知っているさ。

本当は君は、仲間思いで優しい機関車だってね」

ゴードンは、フライング・スコッツマンの話を聞いて、ちょっと微笑む。

その時、寝ていたジェームスも彼に話かけた。

「その通りさ！、君は確かに威張っててプライドが高く文句ばかり言ってるけど、僕は君の事を大事な仲間だと思っているぜ！。

僕も、君をからかっていたことは悪かったよ。ごめんよ」

「なあに！、それはお互い様じゃないか。それによ、お前の黒いボディはかっこよかったぜ」

「ハハハッ！君たちは本当に立ち直りが早いな！。僕も話に参加して良いかい？」

ゴードンとジェームスは、もちろん、フライング・スコッツマンを話に入れた。

その夜は、3台の機関車の楽しいお喋りが続いた。とても綺麗な、お月さまの光と照らされてね…………。

このお話の出演は、ジェームス、ヘンリー、パーシー、エミリー、エドワード、フライング・スコッツマンそして……ゴードンでした。

第4話：まっくろゴードン　　The black Gordon　（後書き）

いかがでしたでしょうか？。

今回は原作に登場するフライング・スコツマンが登場しました。

このお話の元ネタは、文字通りフライング・スコツマンが今年の春／夏にかけて戦時仕様の黒一色のボディになったのを基づいてかきました。

皆さまも、イギリスに行く際はフライング・スコツマンに会ってみてください。

今回は、久々にオリキャラが登場します。

「オリバーとアイリーン　　Oliver and Irene」
をお楽しみに。

第5話：オリバーとアイリーン（Oliver and Irene）（前編）

読者の皆様へ、

静岡県にある大井川鉄道には、大代川側線と言うによつきり生えた路線がございます。

その線路には、入線車両の入れ替えや廃車、または部品取りとされる車両の倉庫でもあります。

そこには、去年頃まで放置されていたE18と言う一台の小さな老兵機関車が居ました、ですが、今は彼の姿はありません。

そんな時に、ソドー鉄道でもE18の同じ機関車が居ました。

それはオリバーが整備工場にて待避線に入れられた時に出会いました。

……どうやら、彼女も同じ大西部鉄道の機関車だったみたいです。

BY…ソドー鉄道員

第5話：オリバーとアイリーン（Oliver and Irene）

オリバーは、ダックと同じ大西部鉄道で働いていた、タンク機関車だ。

彼は、ブレーキ車のトードと、客車のイザベルと一緒にスクラップにされる前に本土からトップ・ハム・ハット卿の鉄道まで逃げ出していたのだ。

でも、スコットランド出身のダグラスに助けられ、トードとイザベルと一緒に、ダックの支線で働いている。

ちよっとうぬぼれた時期もあったけど……今では賢くて、冷静な機関車へと成長していった。

ある日、オリバーはダックと共に機関庫で休んでいた。

ダックは相変わらず、大西部鉄道の事を言っでは、オリバーによく話す。

「ふう、こんなにたくさん働いたのは大西部鉄道に居た以来だね」

「フッフ、全くだ。だけどこっちは車輪とピストンがガクガクするよ」

「オリバー、君は大西部鉄道のあの言葉を忘れたのかい？。大西部鉄道のやり方は……」

「「仕事はみんなきちんと！」だろ？、ちゃんと覚えてるさ」

オリバーはそう答えて、ダックに言い返した。

彼も大西部鉄道の誇りを持っているけど、ダックの話にはいつも呆れる寸前だった。

でも、ここのところ忙しくなってきたので、オリバーとダックは足が痛くて仕方なかった。

「もう一台機関車が居ればなァ……」

オリバーは、そう呟いた。

翌朝、機関士がやってきて、出発の準備をしているところへ……
トップハム・ハット卿がやってきた。

「オリバー、お前の部品もだいぶ痛んできている。クロヴァンズ・ゲート整備工場で修理してもらいなさい」

「でも、僕が不在の間、イザベルとダルシーの面倒は誰がするのですか……？」

「助っ人の機関車が一台やってくる。彼が彼女たちの面倒をみる、それにお前たちとはまた会いたいと言っておったぞ」

ダックとオリバーは、その機関車がどんなのかはわからなかった。だが、ダックは、あのシティ・オブ・トルーロが手伝いにやってくるのではないかと、わくわくしながら考えていた。

間もなく、オリバーが平たい貨車に乗せられた頃に、助っ人の機関車がやってきた。

ところが、やってきたのはシティ・オブ・トルーロではなかった。それどころか、素晴らしい機関車がやってきたのだ。

ダックとオリバーと同じ緑色で、金色の煙突が輝いている。

炭水車には、大西部鉄道の文字が描かれているではないか！。

「オリバー、見ろよ！ ナニー・キャッスルだ！。

僕たちを手伝うためにトップハム・ハット卿が呼んだんだよ！」

ダックは興奮してオリバーに話しかける。

オリバーは、喜びのあまり、言葉に出せなかった。

ナニー・キャッスルは、彼らに汽笛を鳴らして、バックしながらオリバーの乗っている貨車と連結する。

「ここを手伝う前に、まず君を整備工場に送ってあげよう」

「あ、ありがとうございます！」

オリバーは、ドキドキしながら、ナニー・キャッスルにお礼を言った。

でも……内心は残念な気持ちでいっぱいだった。

ナニー・キャッスルは、オリバーを乗せて、クロヴァンズ・ゲート整備工場へ出発した。

クロヴァンズ・ゲート整備工場に着くと、やかましい音がそこらじゅうに響き渡る。

ここは、本土よりちょっと小さいけど、ソドー島の中で最も大きな工場だ。

支線を走る機関車、本線を走る機関車や、本土の鉄道からやってきた機関車、古くなった貨車や客車、車輪などが整備され、心地よく彼らが仕事ができるのだ。

オリバーは、工場内のクレーンで貨車から下ろされた。

彼は、ここが嫌いだった。

なぜなら、整備が忙しくて混んでいるときに、あの路線へ移されるのが嫌だったのだ。

しばらくして、工場長が、オリバーの所にやってきた。

「ここ最近、別の鉄道の機関車たちを整備するのにちょっと忙しくてな。」

整備は三日後あたりで始めることにするよ」

「ええ！？、三日間もあの路線に居ろって言うんですか！？」

「すまないな……3日あたりは我慢していてくれ」

「じゃあねオリバー、三日後に君を迎えに来るから、早く元気になるんだぞ」

オリバーは、ナニー・キャッスルの言葉が耳に入らなかった。

早く整備を終わらせたくて、帰りたがっていた。

その後、オリバーは、整備工場用の機関車のビクターに押されて、例の引き込み線へと移されていた。

彼は、ここの引き込み線が嫌で嫌で仕方がなかった。

そんな不安そうな顔を見たビクターは、オリバーを励ました。

「心配するなよオリバー！、三日も寝泊まりすれば整備されて元気になる！。そうすれば、また元気に走れるさ！」

ビクターはそう言って、仕事に戻って行った。

しかし、オリバーの不安は、溜まる一方だ。

この引き込み線は、「大代川側線」と呼ばれている路線だ。

あまり使われていなくて、線路には草が生え、線路の砂利はボロボロだ。

時々、入れ替えや他の鉄道からやってくる列車を退避させるため

に使われる。

……だが、実際は工場内で置ききれない廃車や、修理前の機関車、そして部品取りとして置かれる機関車の倉庫として使用されるのが多いのだ。

部品取りにされる機関車たちは、まだ走れるオリバーを嫉妬の目でジロジロと睨んでいる。

「……こんなところに居たくないよ、まるであの時のことみたいじゃないか」

オリバーは、震えながら言った。

ここに居ると昔のことを思い出すからだ。

以前居たイングランドの鉄道の引き込み線で、同じような事があつからだ。

ディーゼル機関車たちは、他の蒸気機関車がスクラップにされていく姿を見ては嘲笑っていた。

オリバーの仲間も、まだ走れるのに次々とバラバラされていてしまった。

「もし、僕がトードとイザベルを連れて逃げ出していなかったら、今頃僕たちはスクラップだったかもしれない……」

その夜、その日は凄く凍える夜だ。

冷たい風がピューピュー吹きかけ、引き込み線の機関車たちを震え上がらせる。

寒くて、冷たくて、煙突が凍りそうなくらいなのだ。

オリバーは辺りを見渡した、辺りは不気味なくらい、静かだった。明りが一層に見えず、真っ暗闇だ。

彼が何もないと考え付くと、ひと眠りしようとした時に、誰かの咳声が聞こえてきた。

「ん？、機関車の声みたいだけど…」

また、咳声をする、隣からだ。

「隣に居るのは誰だい？」

「…ご…ごめんなさい、釜に誇りが入っちゃって…」

隣の機関車は、オリバーに謝った。

ところが、オリバーはその機関車を見てびっくりした、その機関車は、錆びていて色がほとんど落ちているけど、タンクには大西部鉄道のマークがかすかに見えていたのだ。

「アイリーン？、ひょっとして君かい？」

「…：…やっぱり…オリバーだったんだ…：…こんなところでまた会えるなんて…：…」

「どうして君がここに居るんだい！？、確か君は、遊園地に引き取られたはずだろ？」

「…：…そうだったんだけど…：僕を買い取ってくれた遊園地…：…潰れちゃったの」

アイリーンはそう答えた。

オリバーも、まさか同じ大西部鉄道に居た仲間が、ここで会えるとは思ってもよらなかったのだ。

でも、彼はアイリーンがここに居ると言うことは…と嫌な予感を

したのだ。

「じゃあ、まさか君は…」

「……うん…修理に出されたただだよ……」

彼女はそう答えると、オリバーはホッとした。

アイリーンは、オリバーと仲の良い友達だからね。

「だけど、住むところが潰れたと言ったけど……今はどうしているんだ？」

「……オリバーがソドー島に行った後だよ……僕、行くところが無くなってスクラップにされちゃうところだった……」

でも……本を出している出版社の人たちが僕を……もらってくれたけど……」

「…けど？、何があったんだい？」

アイリーンは、オリバーにその後の事を話した。

彼女は、出版社に引き取られたはいいのだが……実際は過酷な物であった。

建物の中ではなく、入口に展示されたアイリーンは、風雨にさらされて、ボロボロになってしまう有様だ。

酷いことには、悪戯好きな子供がスプレーでボディに落書きされてしまうなどが多くあった。

「大西部鉄道の機関車にそんなひどい扱いをするなんて！」

それを聞いたオリバーは、顔を真っ赤にして怒った。

同じ大西部鉄道仲間が酷いことをされているのは、あまり好きではないのだ。

「……以前までは、ずっとそんな感じだった……でも、出版社のお偉いさんが……」「君を綺麗にしてくれる所に頼んでおいたよ」って優しく言ってくれたの……

それから僕は……ここに居るんだ……修理に出された頃から」

「じゃあ、修理に出されたのはいつ……」

「……三年前」

それを聞いてオリバーはびっくりした。

アイリーンは三年間もの間、ずっと修理されていないからだ。

それどころか、彼女の話から今年にその出版社に戻るのだが、未だに修理される気配が無かった。

待っていても……作業員や、あのビクターまでもが、来てくれなかった。

「……それで気がついたら……僕の後ろにもう一台部品取りの機関車が……来みたいなの……」

「やれやれ、ビクターまで忘れるなんて……」

オリバーは呆れかえった。

「……でも、オリバーが無事で……よかったって思っているんだ……」

「ああ、あの時は僕もソドー島に逃げらなかったらスクラップにされていたからね」

「……僕もオリバーと一緒に……働きたかった……」

「何故だい？、君はまだ走れるはずなのに」

彼女の言葉に半信半疑なオリバーは、どうやら気になるようだ。
アイリーンは、さっきのお話の続きを聞かせる。

「……出版社の人たちは：僕が帰ってくるのを：待っているの……
今までの建物を取り壊して：作り直されたけど……僕を置くため
に展示スペースに：看板まで作ってくれたんだって……」

オリバーは、残念な気持ちだったが……アイリーンを待ってくれ
ている人たちの事を思うと……どうにも出来なかったのだ。

アイリーンの顔は、微笑んでいながらもどこか：寂しげだった。
この時にオリバーは、アイリーンが、自分たちの鉄道で働きたい
と言う気持ちはあったのを気づいてしまった。

そこで、彼はアイリーンを元気づけるために、自分が居るソドー
鉄道の話をして、彼女を元気づけることにした。

ダックの支線の事や、ちんまり鉄道の話、トードの名案で貨車た
ちのボスのスクラフィーをバラバラにしまった話などをしては
：アイリーンをクスクスと笑わる。

オリバーは、初めてこの路線に来て、楽しいと思ってしまった。
夜が明けても：朝になっても、二台のおしゃべりは長く続いた。

だが、そんな楽しい日々も終わりが近づいてきた……。
とうとう、オリバーが修理される日がやってきたのだ。

長い間アイリーンとお喋りをしていたオリバーは、朝までぐっす
りと眠っていた。

昼ごろになると、オリバーは目を開けて、アイリーンにさよなら
を言おうとした……。

ところが、隣を見てもアイリーンの姿が居ない！。

オリバーはびっくりだ。

辺りを見渡してアイリーンを探したが、やはり彼女はどこにもいなかった。

「どこに行ったんだ…？」

オリバーは段々、不安になってきた。

やがてビクターが、オリバーを工場に連れて行くためにやってきた。

「よう！三日間の間、寒かったろう？。しょぼくれた顔をしてどうしたんだい？」

オリバーはビクターにアイリーンがどこに行ったかを話した。

それを聞いて、ビクターはすぐに教えてくれた。

「心配すんな。彼女なら、お前さんが寝てる間に修理されて、トレラーに乗って帰ってったよ。かなりの別嬪さんに見違えたよ」

それから、修理を終えたオリバーは、ナニー・キャッスルに牽かれた貨車に乗って戻ってきた。

：ナニー・キャッスルが帰った後、機関庫でオリバーはダックにアイリーンのことを話した。

「トップハム・ハット卿に知らせよう！」

「そうしたいのは山々なんだけど、彼女はスクラップじゃなくて修理されているから無理だよ……」

確かに、そうだった。

2台は諦めようと思ってたその時：彼らの前に誰かがやってきた。トップハム・ハット卿だ！。

「おっほん！一体、何の話をしているんだね？」

「あ、あの：実はこの支線にも、もう一台機関車を増やしてくれませんか？」

ダックは、思いきって言う。

「うーむいきなりそう言ってもなあダック、だがここもお前たち2台では疲れもたまるのもよくわかる。

どこかに展示してあって走れるのが居ればなあ……」

「一台、本土に居ます！彼女は……」

「言わなくても分かっている。実は君が工場に居る間に知り合いの出版社に行ってきた、どうやらお前たちと同じ大西部鉄道の機関車を展示していたみたいだ。

ワシは彼に頼んで、ここの手伝いをしてもらう機関車を借りることにした」

「どうしてそれを知っているのですか？」

「ハッハッハッハッ！、工場長に一度、彼女を見せてもらって全てを聞いたのだよ。

アイリーンはこの鉄道で働くことになった！」

「どうもありがとうございます！」

オリバーとダックは大喜びで汽笛を鳴らして、大歓声を上げた。

まもなく、アイリーンはダックの支線が忙しい時に、出版社から手伝いにやってくることになった。

彼女も、ダックとオリバーと同じ大西部鉄道の美しい色に戻っていて、ちんまり鉄道の機関車たちとすぐ仲良くなった。

中でも、アイリーンはオリバーと一緒に働けるのが、何よりの幸せだ。

みんなは「小さな大西部鉄道に可愛い機関車がやってきた」と言っている。

そして、彼女の今の機関庫でもある出版社の看板には……「ソド―島の小さな大西部鉄道で働く機関車」と書かれていた。

このお話の出演は、オリバー、ダック、ビクター、ケビン、ナニー・キャッスルそして……アイリーンでした。

第5話：オリバーとアイリーン（Oliver and Irene）（後妻）

いかがでしたか？。

今回のお話も実話に基づいたお話となっております。

今回のお話になった元ネタは老兵機関車E18は、3年間もの間修理されずに放置されていた機関車であります。

そんな中、この機関車は「エリエイ」という出版社にて一時修理に出されたままでした。

出版社側は、建物を建て直された時に、E18を展示するスペースが作られ、看板にはE18のシルエットが描かれています。

そんな最中、彼の姿は未だに行方知らずとなっております。

機関車の帰りを待つ持ち主と放置され続けた機関車：彼は修理された姿で戻ってくるのか心配です。

もしも夏休みの旅行の際に、大井川鉄道に行く予定の皆さまは、「E18はどこに居るのですか？」と話してみてください。

今回は「はなびトラック（Fireworks Track）」をお楽しみに。

クロヴァンズ・ゲート整備工場（Crovans Gate Steamworks）

ハット卿の鉄道にある修理工場。

ちよつと本土の工場とは小さいため、クルー市の修理工場に送られることが多い。

すぐ終わる車両も居れば、1日～3日はかかる。

ただ、工場内が機関車や貨車、客車でいっぱいになると、置ききれ

ない修理がまだな機関車や部品取りの機関車を「大代川側線」に入られる。

ここで働くのはタンク機関車のビクター（主に大代線の車両を入れ替え、工場の部品を機材を取りに行くのを担当）とクレーン車のケビン（荷物運びを担当）が居る。

元ネタは原作設定と13期に出てくる「ソドー整備工場（Sodor Steamworks）」。

追記…挿絵も募集しております。

第6話：はなびトラック (Fireworks Track) (前書き)

読者の皆さまへ、

今年の夏はかなり暑い最中に、

熱中症で倒れてしまう人が多くなりつつあります。

気温もかなり暑く、冷たい飲み物や冷たい場所が欲しくなりますが

……

その暑さをぶっ飛ばすために、夜中に御家族一緒に花火で遊ぶのはとても快適で気持ちいい気分になります。

そんなソドー島でも、トップハム・ハット卿が花火大会を始めることになりました。

しかし……この花火に使う原料の火薬を運んでいたトラックは厄介者で威張り散らしていました。

彼があんな事をしなかったら、あのような恐ろしい事故にはなりませんでした……。

第6話：はなびトラック (Fireworks Track)

今年のソドー島は、とても暑い。

しかし、機関車たちはそれでも、全国各地からやってくる観光客や物資を運ばなければならない。

「やあ！、スコッツマン！」

「今日も観光客が多くて止まる暇もないよ」

トップハム・ハット卿は、暑さを吹っ飛ばすため、ティッドマウス駅で花火大会を開くことにした。

子供たちも、綺麗な花火を見るのを何よりも楽しみにしていた。

ある日、トビーとメービスが、ナップフォードの港で花火に使うための火薬を運ぼうとしていた。

この火薬は、スパークリング花火に使う特別な火薬だ。

しかし、ちょっとした不注意な扱いをしてしまったら、爆発を起こしてしまう。

これを運ぶには、慎重に走らなければならないのだ。

ところが、この仕事には問題があった。トラックのせいだ。

トラックの名前は「ルーサー」、火薬を運ぶトラックだ。

威張り屋のルーサーは、トビーとメービスに近づくと、偉そうに言った。

「オイそこの貴様ら！、列車共！。動くな！気を付け！」

「どうしてよ？、あとは火薬を運ぶだけよ」

メービスが、言い返した。

「何を言うか！？、まだ点検が済んでおらん！」

「作業員が終わらせたわよ、点検は」

「ならば何をもたもたしておる！？、早く波止場まで火薬を運ばんか！この役立たず共めが！」

ルーサーは、そう言うと言火薬を乗せるために戻って行った。

メービスは、ルーサーに頭にきたが……かわいそうに、トビーは傷ついてしまった。

目的地に着くと、2人はフライング・スコッツマンとヒロにルーサーのことを話した。

「やれやれ、君らが来る前に僕たちも奴と揉めていたんだ。

「貨車がたくさんになるまで集めろ！まだ集まっていない！終わったら必ず報告しろ！」と言ってやかましかったよ。

アレで本当に軍用のトラックなんだろうか？」

「彼は元軍用で、戦争のことを誇りに思っているから成りあがっているんだ……

私も一時は軍で働いていたこともあるが、あそこまで威張らなかつた。

だけど、彼の場合は石頭で鉄道を忌み嫌っているからな、君たちが文句言う気持ちもよくわかる」

フライング・スコッツマンとヒロは、メービスとトビーに同情し

たが、

ルーサーの態度はますます悪くなっていく始末だ。

昼ごろになると、ルーサーは火薬を積み終えて休憩しているエミリーとパーシーに乱暴な態度を取った。

「オイ、その芋虫と女！。勝手に休むんじゃない！、俺が休めと言うまで火薬を運び続けろ！

聞こえんのか！？ただちに火薬を運べ！！」

「僕は芋虫じゃないよお！」

パーシーは「芋虫」と呼ばれてショックを受けた。それを聞いたエミリーはパーシーをかばい、ルーサーに怒った

「人の悪口を言うなんてよくないわ！パーシーが可愛そうじゃない！」

「何がかわいそうだ！、芋虫と言って何が悪い？、

その芋虫は車輪が小さいくせして怠けてばかりいる！

女が口をはさむ問題じゃない！。それが嫌なら水と石炭が無くなるまで働くのだ！」

エミリーはルーサーを睨み続けた、友達が悪口を言われるのが何よりも大嫌いだった。

彼女はエドワードと同じ親切なので、パーシーを気の毒に思った。

次にルーサーは水を補給しているトーマスに怒鳴り散らしていた。

「オイ！邪魔なのだ！その水をがぶがぶ飲んでいるタンポ頭！

！。

そこどけ！さっさと行くのだ！」

「何だよお！？、僕が水を飲むのは勝手じゃないか！！（怒）」

「誰の命令で水を飲んでるのだ？」

ここは軍の持ち場で、そして俺が一番偉いんだ！。

俺の命令に逆らうやつは反逆者としてスクラップにするぞ！。

さあ！甘い汁をすすりたければとっとと働け！。蒸気を挙げてピストンを動かすのだ！」

トーマスはカチンと来た。

「……ったくもおお！！あんなムカつくトラックは初めてだ！」

機関士もカンカンに怒っていた。

あんなに失礼なトラックと出合ったのは、初めてだ。

ティッドマウス駅のプラットホームに入ると、

トーマスの機関士はトップハム・ハット卿に相談した。

「分かった。もしもあいつが何かしでかしたら必ずお仕置きをするからな。」

だが、奴の態度で何か恐ろしい事件が起こらなければいいが……」

しかし、トップハム・ハット卿の悪い予感、当たってしまった。その晩のことだった……

機関車たちは、サドリーの波止場にある火薬倉庫で、火薬が全部

しまわれるのを待っていた。

丁度、トーマスの積み荷で、この仕事はおしまいだ。
やっと、明後日からは楽しみな花火大会が始まる。

そうになると、あの口うるさいルーサーから解放されるのと……
綺麗な花火を見られるのが楽しみだった。

ところが、トーマスが荷降ろししようと倉庫に入ろうとする時に

……

名高いクラクションと共にルーサーが割り込んできた。

「オラ！そこをどけ！俺の仕事が先だ！」

「自分の番が来るまで待てよ！荷降ろし中だぞ！」

「とつとと道をあけるのだ！これは命令だぞ！」

あまりの勝手な態度にとうとう、トーマスの堪忍袋の緒が切れた。

「僕たちはお前の命令で動いてるんじゃない！、

トップハム・ハット卿の命令で動いているんだぜ！」

それに花火の火薬でも危険なんだ！、不注意に扱うと爆発しちゃうんだぞ」

「線路を走る脳なしに命令される筋合いもない！、俺は動きたいときに動くのだ！」

だが、ルーサーは、トーマスの忠告など聞く耳持たずに、勝手な行動を起こした。

そして、とんでもないトラブルが起きてしまったのだ。

一人の作業員がルーサーの前を通ってしまい、運転手はハンドルを切って避けた。

ボデイがぐらりと揺れ、山積みにならなくなった火薬の木箱にぶつ

かかってしまった。

その衝撃で火薬に火が付いてしまい、一個目の木箱が爆発し…
二個目に引火して爆発…三個目に続いて木箱に火の手が回った。
ついに、大火事になってしまった。サイレンがけたたましく鳴り
始めた。

！！
W O O O O O ！！！！ W O O O O O ！！！！ W O O O O O O O ！！！！

「火薬が爆発した！！みんな早く逃げろオオ！！」

作業員たちは、一目散で倉庫から逃げ出した。

機関車たちも、貨車が引火しないように安全な所にバックした。

「運転手！俺を動かすな！命令なのだ！」

「バカを言うな！、爆発に巻き込まれたら命が無いんだぞ！」

運転手はルーサーの命令に耳を貸さずに彼をバックさせた。

トーマスも、急いで倉庫から出ようとした…その時！。

「ゴホッ…！ゴホッ…！！…ま、待ってくれえ…！」

作業員の一人が、足にやけどをしてしまい、動けなくなっていた
のだ！。

トーマスは慌てて止まり、機関士と助手がその作業員を担いでト
ーマスに乗りこむのを待った。

…機関士たちが乗り込むと、機関士がスチームを力一杯に入れ、
猛スピードで逃げだしたが……時すでに遅しだった！。

「うわぁ！熱いよお！……ゴホッ！ゴホッ！」

トーマスは、咳こんだ。熱くて苦しくて……怖かった。

「トーマス！！水道管のところに逃げよう！」

アレを壊して水を噴き出せば、炎から身を守られる！」

機関士が大声で叫ぶと、トーマスは水道管の所に真っ先に逃げた。
やがて……トーマスの目の前は炎が包み込んできた。

しかし、水道管を壊す必要が無かった。

巨大な水道管はさっきの爆発で、水が噴き出していたのだ。

「早く水道管の所に行かないと……僕たちやけがをした作業員の人の命が危ないんだ！」

危機一髪だった、トーマスはずぶ濡れになりながらも消防隊が来るまで、ずっとそこに居た。

やがて、消防隊が急いで駆け付けると、消火作業を開始した。

なんとか……明け方になった頃に、

火事は無事におさまったが……

辺り一面はめちゃくちゃになってしまい、倉庫もがれきの山となっていた。

花火に使う火薬は全部、ダメになってしまった。

だが、パーシーはトーマスが居ないことに気づき、大声で叫んだ。

「トーマスが！…トーマスがまだ倉庫の中に居るんだ！！」

作業員たちは、パーシーの悲鳴に驚いた。

他の機関車たちも、トーマスの無事を祈るしかなかった。

だが、ルーサーは違った。反省の色もなしに嫌味を言ってきたのだ。

「ふん！鉄くずが一台壊れてしまったただけだ！。たかだかそれ位でビービー泣くんじゃない！」

「お前はなんてトラックだ！！。お前が強引に横付けしようとしたのが悪いんだ！！」

監督官が怒った。

次に作業員が言う。

「それより、急いで機関車と乗務員を大至急救助しよう！」

がれきを片付けるのは…時間がかかった。

他の機関車たちも、見ている暇もなかった。

みんなはトーマスを助けるために、一生懸命頑張った。

ヒロとスコツツマンが、クレーン車を使って、重いがれきを引っ張っては崩していた。

でも、ルーサーはガソリンを抜かれて、エンジンを落とされていたら、

彼にまた邪魔されては困るからだ。

ブッチが、小屋のような形で崩れた奇妙ながれきの破片を引っ張

ると…………

<ガラガラ……ガシャーン！>

体中、煤だらけになったトーマスが、顔を出したのだ。
機関士たちも、無事に機関室から姿を現す。

「トーマス！無事だったのね！、けど…その顔（笑）」

「いやー…作業員の一人が足にやけどしてて乗せて逃げただけど、火の回りが早くて抜けられなかったよ。

水道管が壊れてなかったら、今頃僕たちは危なかったんだ。

あーあ、せっかく塗り替えた僕の青いボディが台無しだ……」

ハッハッハッハハハハハハ！！

彼の青いボディは、まるで焦げたトーストのように真っ黒に汚れていた。

それを見たみんなは、一斉に笑い転げていた。

でも、トーマスが無事でみんなはホッとしていたので、力が抜けて行くように笑っていた。

……まもなく、トーマスと貨車たちを無事に、助け出した。

やけどをした作業員は、

仲間に担がれながらフライング・スコッツマンに乗せられて、病院まで向かった。

監督官が、貨車の中を確認すると……奇跡的に花火の火薬は、無事だった。

彼は、戻ってくると、トーマスに笑いかけた。

「君が勇敢に行動してくれたおかげで、火薬はみんな無事だった。ちよつとしか少ないけど……これで花火大会ができるよ！」

しかし……機関車たちの顔は浮かばれなかった。

ずつと楽しみにしていた花火大会が、この事故のせいでちよつとぐらいしか、出来ないからね。

「こんなに少ない火薬では、子供たちががっかりするなあ……」

ヒロがそう言うと、機関車たちは子供たちの悲しい顔を浮かべながら……しょんぼりだ。

……でも、そんなにしょんぼりすることは無かった。

途中からやってきたエリザベスが、火薬をいっぱいに積んでやってきたのだ。

ようやく、花火工場で花火は無事に作られ、ティッドマウス駅に運ばれた。

そして、花火大会が始まった、今年の花火はとても……特別な花火だ。

ドーン！と打ち上げられ、綺麗に咲く花火の形がなんと……トーマスや、

その仲間たちの形を模った綺麗な花火だった。

子供たちは大興奮だ、特に、トーマスやエミリー、スコツツマンにトビー、パーシーとヒロ、スコツツマンは物凄く興奮していたのだ。

……まもなく、サドリーの波止場にある倉庫は建て直された。
だが、トップハム・ハット卿や監督官はルーサーのしでかしたこ
とを見逃さなかった。

そこで、彼を花火工場から、ゴミ置き場で働かせることにした。
ゴミを運ぶことになったルーサーは、
もうみんなから「花火トラック」から「ゴミトラック」と呼ばれ
るようになってしまった。

「とほほ……命令なのだ……命令に従ったまだなのだ……命令は……命
令なのだ……とほほ……（泣）」

ルーサーはそう、泣き呟いたが、もう彼を軍用トラックと思う者
は誰1人……居なくなってしまった。

このお話の出演は、トーマス、エミリー、パーシー、ヒロ、フライ
ング・スコッツマン、トビー、ルーサーそして……メービスでした。

第6話：はなびトラック（Fireworks Track）（後書き）

いかがでしたか？。

今回のお話の元ネタは、

がんばれタッグスの「いしあたまのブルーノーズ」と、

2004年11月3日、

デンマーク・コーリング市シースト花火工場にて

トラックが積載する作業中に爆発が起こり

倉庫が大火事になってしまった大事故を基づいて書きました。

尚、がんばれタッグスは機関車ではなく、帽子をかぶって首を動かすタグボートの物語です。

制作はトーマス模型時代で活躍したデビット・ミットン氏とロバート・カルドナ氏が作りあげました、音楽もきかんしゃトーマス第1期〜第7期のBGMを担当したマイク・オドネル氏とジュニア・キャンベル氏が担当をしていました。

次回のお話は「えきのちかしつのできごと（A Weird Man And Black Dog）」をお楽しみに。

質問、感想、アドバイス、イラストなどもお待ちしております。

アイリーン&ルーサーの紹介 今後のお話（前書き）

久々のオリキャラ紹介と今後の予定です。

アイリーン&ルーサーの紹介 今後のお話

読者の皆さま、この度「きかんしゃトーマスとなかまたち 〜 Thomas The Tank Engine」を
ご愛読ありがとうございます。

おかげさまにより、この小説は見事1,000PVまで達しました。
感想は少ないのですが、皆さまがこの小説を読んでもくれることが
何よりの嬉しい限りです。

今回は、お話ではありませんが、オリキャラを紹介させていただき
ます。

また、脳内声優もあります故、ご了承願います。

名前…アイリーン (Irene)

車両種類…サドルタンク機関車

出身鉄道…大西部鉄道

性別…女

脳内声優…森永理科

一人称…僕

カラーリング…深緑。タンクの両側に「GWR」マークが付いている。

モデル…グレート・ウェスタン鉄道のClass 1361

名前の由来…シャーロック・ホームズに出てくる人物「アイリリー・アドラー」から

性格…

親切で真面目だが、内気で控えめ。

褒められたりからかわれたりすると顔を赤くしてたくさん蒸気を吐きだしてしまうほどの恥ずかしがり屋。

オリバーのことが好きで、ぼそぼそと喋るがオリバーが居ると嬉しくなる。

運用…入れ替えや貨物列車牽引と旅客列車、砂利運びなどを担当

お話の元ネタ…

大井川鉄道の新金谷駅の大代側線に修理をされずに放置された老兵小型機関車「E18」が元。

説明…

オリバーがトード達を連れて、ソドー島へ逃げ出した後にスクラップにされそうになったが、

本土の遊園地の持ち主に買いとられて展示されていたが……その遊園地は不景気によって閉園となり行くあてもなくなってしまった。その後本土の出版社の持ち主に引き取られて、入り口に置かれていたが、あまり良い場所でもなく……風雨にさらされて錆びだらけに、

拳句の果てには心のない人間にスプレーで落書きされるなどの被害を受けていた。

この被害に悩んだ持ち主がクロヴァンズ・ゲート整備工場に修理を頼んだが、作業員やビクターにさえ忘れられ、三年間放置された。

によつきりと伸びた「大代線」に置かれるも、部品取り変えの為に
入ってきたオリバーと再会し、彼が無事だったのを見て安心して
いる。

ちなみに、持ち主の出版社は古くなり取り壊して建て直し、彼女を
展示スペースを造り、看板にはシルエットまでも描かれている。

その後、やっと修理されて出版社の所へ帰るも、持ち主と知り合い
であるトップハム・ハット卿によって、忙しい時にソドー鉄道へや
つてきて、ダックの支線で働くことになる。

尚、看板もオリバー、ダック、アイリーンのシルエットに描き直さ
れ、「ソドー島の小さな大西部鉄道で働く機関車」と書かれた。

名前…ルーサー (Luther)

車両種類…軍用軽汎用トラック↓火薬運搬用トラック↓ごみ運搬用
トラック

出身…イギリス

性別…男

脳内声優…小関一

一人称…俺

カラーリング…灰色の縞模様とダークグリーン

モデル…ベッドフォードQLD

キャラクターの元ネタ…がんばれタッグスに出てくる海軍タッグス
「ブルーノーズ」から

名前の由来..

名高い軍隊と言う意味から

性格..

石頭で頑固な威張り屋。

花火工場の仕事現場は自分の命令で動かさないと罵声を言い放つ。
元軍用ではあるが、実際は1年半ぐらいしか使われていないが、かなり偉そうに成りあがっている。

また、戦争のことを誇りに思っている。

鉄道を「甘い汁をすすめるだけの役立たず」と思うほど忌み嫌っている。

運用.. ナップフォードの港からサドリーの波止場にある倉庫まで火薬を運ぶのを担当

お話の元ネタ..

こちらもがんばれタッグスの「いしあたまのブルーノーズ」とデンマーク・コーリング市シースト花火工場爆発事故が元ネタ。

説明..

以前までは軍用として1年半ぐらい使われていたが、軍から追い出され花火工場で働いていた。

そのことからみんなからは「花火トラック」と呼ばれていた。

ティッドマウス駅で行われる花火大会までに火薬をサドリーの波止場にある倉庫に火薬を持っていく仕事をしていたが..

危険な仕事なので慎重に働く機関車たちに苛立ってしまい、悪口と罵声を浴びさせるなど先走り過ぎて威張り散らしていた。

おかげでトーマス達は彼の行動に頭に来たり、傷ついたりしてしまった。

トップハム・ハット卿や花火工場の人たちも、彼のいい加減な性格には頭を抱えるまでだった。

だが、その夜にトーマスが積み降ろし作業中にかかろうとしたところ、強引な横づけで火薬が入った木箱と衝突。

その結果、倉庫は大火事になってしまい……脚をやけどした作業員とトーマスが取り残されることになってしまう。

無事、トーマス達は助け出されたが……倉庫は完全に燃えてしまい、火薬も全部だめにしてしまった事態を起こした故に、

トップハム・ハット卿と監督官は彼の失態を許せず、罰として花火工場からゴミ置き場へ移動させた。

もう、みんなから「花火トラック」ではなく、「ゴミトラック」と呼ばれている。

今現在では、ルーサーの性格は未だに直らず……どんどん体中汚くなってきている。

以上により、今回のオリジナルキャラ紹介を終えます。

ちなみにルーサーのモデルは2種類ありますが、1台目のモデルはどこに顔を付けるのかイメージに遭わずに没となっています。

今回も2台だけのご紹介となったことをお詫び申し上げます。

続いて、今後のトーマス小説のお話のリストです。

10話辺りから、トーマスの主役話が沢山あります。

今後のお話…

第7話…

えきのちかしつのできごと A W e i r d M a n A n d

B l a c k D o g

第8話..

ヒロとビルとベン 〈 B i l l a n d B e n a n d H i r
o 〉

第9話..

ブルマ 〈 B l o o m e r 〉

第10話..

トーマス、にほんへいく 〈 I t g o e s t o J a p a n
T h o m a s 〉

第11話..

うめこうじのきかんしゃたち 〈 U m e k o j i S t e a m E
n g i n e s M u s e u m 〉

第12話..

トーマスとはつねミク 〈 T h o m a s a n d H a t s u n e
M i k u 〉

第13話..

ばくだんきかんしゃ 〈 B o m b E n g i n e 〉

第14話以降はまだタイトルや誰を主役にするのかは未定となつて
おります。

尚、この小説は全26話まで連載していくつもりです。

また、実際に起きた事件・事故・自分が経験した話なども募集して
おります。

質問やリクエスト、イラストなども募集しております。

トーマス小説で、皆さまの疲れが癒されることを……東日本の被災

者の皆様方に笑顔が戻る日を祈りつつ、トーマスの物語を書き続けることを誓います。

アイリーン&ルーサーの紹介 今後のお話（後書き）

あとがきにて、皆さまにアンケートをとります。

Q…このトーマス小説は面白いですか？

- 1…面白い
- 2…別に
- 3…面白くない
- 4…なんでトーマス？

というアンケートです。

もしもこの小説が面白くない、または不快になってしまう方がございましたら、深くお詫びと謝罪を申し上げます。

この度、ご愛読を本当にありがとうございました。

第7話：えきのちかしつのできごと A W e i r d M a n A n d B i

読者の皆様へ、

とうとう10月になりました。

もうじき寒くなってきましたね、ハロウィンはどのようにお過ごしですか？。

今回のお話は、ちょっとした怪談話です。

フライング・スコツツマンはこのお話でヨーク国立鉄道博物館へ帰ってしまいました。

彼は帰る前にパーシーが体験した事を書いてほしいと頼んできました。

パーシーは嫌がるだろうなと思いましたが……

「もう僕は怖くないから、書いてもいいよ」と嬉しそうに言ってきました。

彼もすっかり、新しい友達とうまくやってるみたいですよ。

第7話：えきのちかしつのできごと A W e i r d M a n A n d B i

フライング・スコッツマンがトップハム・ハット卿の鉄道に居るのも、もう一週間となった。

そろそろ、彼は館長と一緒に、鉄道博物館に帰ることになるのだ。フライング・スコッツマンは帰る前に、トップハム・ハット卿に貨車を牽かせてほしいと頼んだ。

トップハム・ハット卿は考えてみたが……結局、貨車を牽くことを許した。

だけど、貨車は貨車でも、トーマスやパーシーが牽く郵便列車を牽くことになった。

トーマスとパーシーも、快くスコッツマンを迎え入れ、大の仲良しとなった。

……ティッドマウス機関庫に居ると、スコッツマンはこう話した。

「ゴードン、貨車ってのは引くのもいいものだね」

しかし…ゴードンはむっとしてこう答える。

「ふんっ！、お前が汚い貨車共を牽く姿なんてみっともないったらありゃしない！」

「全く、君の貨車嫌いにも困ったものだよ…」

スコッツマンは呆れてこう言うが、ゴードンが素直じゃない性格なのは彼が良く知っているのだ。

郵便車を牽いていると、夜空の星がきれいだし、お月さまが彼らを照らしてくれる。

スコツツマンは：生まれて初めて、のどかな田園地帯を走りながら夜空の星を眺めた。

ある晩の真夜中のことだ。

パーシーが、郵便列車を牽いて、グレート・ウオータトン駅に向かっていった。

今日で、郵便配達の仕事が終わる。

彼はプラットホームに駆け込み、荷降ろしするために停車した。突然、車掌が肩を震わせ寒そうに凍えた。

「今日は冷え込むように寒いな……」

車掌が言った。機関士も助手も、同じだ。

「早く帰って、暖かいココアでも飲みたいよ」

「そういえばこの駅には、地下室があったな。ちよつとここで休憩していくか」

助手がそう言うと、機関士たちは賛成した。

でも、パーシーはビクビクだ。この間ダックから、グレート・ウオータトン駅の地下室にはシスターの幽霊が出ると言う噂を聞いたからだ。

「……やめた方がいいですよ、その地下室には幽霊が……」

「ハッハッハッハッ！大丈夫だよパーシー。幽霊なんか居ないさ、居るとしても彼女は悪いことはしない」

車掌は、笑いながらも、地下室に入って行った。

機関士と助手は、暖かいココアを作るために、パーシーの機関室からココアパウダーを探していた。

「幽霊が出ないといいけど……」

パーシーはそう呟いた。

機関士が、ココアパウダーを見つけて、地下室に下りようとした。
……と、その時!。

地下から車掌が悲鳴を上げながら逃げてきた。

「幽霊だ! 幽霊が出た!」

車掌はそう言うのと、機関士たちに事情を説明した。

「シスターの幽霊じゃないんだ!、スコットランドの帽子をかぶった男が

私を殴ったんだ!」

「何をバカな事……」

「本当だ! おまけに黒い犬が私の足を噛んだんだ!」

「それで、その男と犬はどこに?」

「石炭部屋に消えてしまったんだ、私も後を追ったけど、居なくなつてた……ここの地下室で休憩するのはやめよう!」

しかし、機関士と助手は未だに半信半疑だが、車掌の慌てぶりは異常なものだ。

「とにかく話はわかった。明日、またここに来た時に調査しよう」
「ええっ!? またここに来るのお!?!」

パーシーは、嫌がるが：明日も郵便配達の仕事があつて、またこの駅に来なくてはならない。

翌朝、パーシーはプラットホームで、重連列車を牽いているダックとアイリーンに昨日の出来事を話した。

「変だなあ？、僕が聞いた話だとシスターの幽霊だったんだけど…」
「……僕が聞いた話だと……そのシスターさんは金色の長い髪をしていて……すごく綺麗な人って聞いたよ……」

「でも気にするなよ！。これはただの噂話だから」

そうは言っても……パーシーの震えは収まらなかった。
みんなは、話を聞くと大笑いした。

「じゃあ骨でもあげたらどうだい？、そうしたらわんちゃんのお化けは消えるかもね☆」

ヘンリーはそう言ってからかった。

「どうせ僕の話なんか信じてくれないんだから……」

夕暮れ、デューゼルがゴロゴロ唸りながら、パーシーに近づいてきた。

「お前、昨日の夜に幽霊と出会ったんだって？」
「……だから何さ！」

「そりゃあ、お前ら蒸気機関車に恨みを持つてるかもな?。」

大昔にロケット号の間抜けが、お客の一人と衝突事故を起こしたって事件があったらしいぜ。

…ふんっ! 蒸気機関車って奴は大昔からミスを起こしてばかりで役立たずだな」

そう言うのと、ディーゼルは走り去った。

「もう僕…郵便配達なんてしたくないよ……」

可愛そうに……パーシーはすっかり怯えてしまった。
とうとう、機関庫から一步も出なくなってしまった。

まもなく、トップハム・ハット卿がやってきた。

「一体、どうしたんだね?。郵便配達の仕事は大好きだったんじゃないのか?」

「行きたくありません!」

「どこか、具合でも悪いのか?」

パーシーは、叱られる覚悟で、正直に話した。

「グレート・ウォータートン駅の地下室に幽霊が出たんです!。」

シスターの幽霊じゃなくて、黒いわんちゃんと男の人なんです!」

話を聞いた直後、トップハム・ハット卿は深刻そうな顔をした。

「話はわかった。今日は郵便配達を休みなさい、今夜の配達はトー

マスとフライング・スコッツマンに任せる」

その夜、トーマスとスコッツマンは重連列車として、グレート・ウォータトン駅まで向かうつもりだ。

今回はトップハム・ハット卿が作業着を着て、夜行列車の仕事を手伝うことになって、トーマスたちは驚いた。

ポーターは郵便貨車に荷物を積んでいる。

トーマスは、ビクビクしていた。

スコッツマンはトップハム・ハット卿から「トーマスはあまりスピードが出ないからトーマスと同じ速度で走れ」と

厳重注意された。

「どうしたんだ？ トーマス。幽霊が怖いのかい？」

「ふ、ふんっ！、僕は別に幽霊なんか怖くないね……！！！」

汽笛を大きく鳴らして、蒸気を吹きかけちゃえば幽霊なんか逃げるぜ！」

そう強がっていても、怖いものは怖い。

プラットホームに着くと、車掌は早速、トップハム・ハット卿と一緒に地下室に向かった。

機関士と助手は、彼らが地下に入る様子を見送っていた。

トーマスは辺りを見回すと、どこもかしこも不気味だ、グレート・ウォータトンがこんなに不気味なところだと思ったのは初めてだった。

その時、地下から犬の鳴き声が響いてきた。

<ワンッ！ワンッ！　ワウウウウ…>

「ゆ、幽霊犬の声だ！」

「まさか、普通の犬の鳴き声だよ」

フライング・スコツマンはトーマスをなだめた。

まもなくトップハム・ハット卿と車掌が戻ってきた、例の男と黒い犬も一緒だ。

彼らの腕には、かわいい子犬たちを抱いていた。

「どうしたんですか？」

トーマスの機関士が聞いた。

「ハッハッハッ！、昨日パーシーが出会った幽霊の正体は彼らだったようだ。

ポーターのトニーだよ」

トニーはすぐ、事情を説明してくれた。

「お騒がせして、すみません。飼い犬のキャシーがこのポーター控え室を気に入ってしまったて……

この控え室が無くなると聞いて、離れたくなかったんですよ。

でもまさかお産の彼女が、あの地下室で子犬を産むとは思っていませんでした」

「ひとついいですか？、昨日の夜に車掌を殴って石炭部屋に消えたって言ってましたが…」

スコツツマンがトニーに聞いた。
すると、トニーはちよつと笑い、説明してくれた。

「いやあ、驚いたよ。誰かが地下室に下りてくる足音がしてね、つい泥棒と勘違いしちゃったんだ。

キャシーの奴も私と同じく泥棒と思って噛んでしまったんだ。

彼が車掌だと気づくと私とキャシーは一目散に石炭部屋に逃げたけど、石炭の山に埋もれたんだ。

本当に申し訳ないことです……」

それを聞いたみんなは大笑いした。

翌日、グレート・ウォータトン駅の地下室は閉鎖され、新しくポーター控え室が作られた。

キャシーもすぐ、新しい控え室が気に入っていた。

パーシーも、幽霊事件が解決して、再び郵便列車を引くことになった。

遅くなった晩でも、トニーとキャシーと子犬たちが暖かく迎えてくれる。

あの事件がきっかけで、彼らはすぐに友達になった。

そして三日後……いよいよ、フライング・スコツツマンが帰る日が来た。

元の青色に塗り替えられたゴードンは、スコツツマンが帰るのを

名残惜しんだ。

みんなは、フライング・スコツツマンに別れを告げた。

「また僕たちの鉄道においでよ！、君をずっと待ってるから！」

「時代は変わり続けるけど、この鉄道はいつでも蒸気機関車が走っているみんなに伝えるよ。」

ゴードン！、君も元気だね！」

そう言うと、スコツツマンは機関車たちの大合唱に見送られながら……本土へと向かった。

本線を走っている最中に、彼は一人のシスターに気づいた。

金色の髪をしたシスターは、フライング・スコツツマンを見ると、彼に優しく微笑み、手を振った。

スコツツマンも、お返しに汽笛で別れの挨拶をした。

彼が通り過ぎた後、シスターは満足そうに、消えてしまった。

「フフッ……彼女もこの鉄道が大好きなんだな、またいつか…この鉄道に来るよ」

美しい緑の機関車は、そう呟いて、本土へと帰っていった。

このお話の出演は、トーマス、ゴードン、パーシー、ダック、アイリーン、

ディーゼル、ヘンリーそして……フライング・スコツツマンでした。

いかがでしたか？、9月の間に投稿できなくてごめんなさい。

今回のお話の元ネタとなったのは、

今現在「ダーリトン鉄道センター博物館」となっている、
ノース・ロード駅で起きた怪談話が元ネタです。

尚、この駅のプラットホームは立ち入り禁止となっています。

1890年にて、実際に起きた怪談です。

ディーゼルがパーシーに話していた「ロケット号と人の衝突事件」
はこれも実際に起きた話です。

シスターの幽霊は、実際に起きた話には出てきません。

白米さんのオリキャラの一人「マリア・リュミエール」をゲスト出
演しました。

マリアは設定上、エルフですが、トーマスの世界観を合わせるため
普通の人間の幽霊として登場させました。

白米様、ありがとうございました。

次回のお話はヒロがビルとベンの悪戯に振り回される

「ヒロとビルとベン B i l l a n d B e n a n d H i
r o」をお楽しみに……

感想、質問、登場キャラクターの主役話のリクエスト、
お話のネタ、挿絵なども募集しております。

第8話：ヒロとビルとベン　　Bill and Ben and Hiro

読者の皆様へ：

皆様は「ヒロ」と言う蒸気機関車を知っていますか？。

きかんしゃトーマスの第4長編「伝説の英雄」にて初登場した。

日本の神奈川県出身のD51形機関車です。

今回はそのヒロがあゝの悪戯好きの双子の機関車ビルとベンと出会うお話です。

もちろん、ヒロもミツバチ達の悪戯にはかなり戸惑いましたが……
メービスの考えである行動をしました。

それは、このお話で分かります。

第8話：ヒロとビルとベン (Bill and Ben and Hiro)

ヒロは、日本の神奈川県生まれの大型機関車だ。

彼は、ゴードンよりも大きくて力持ちなので、ゴードンがやきもちを焼くほどだ。

ある日……トップハム・ハット卿の命令で陶土掘りの石切り場を手伝いに向かっていた。

ディーゼル車のボコが、汽笛を鳴らした。

「やあ！どこに行くんだい？」

「石切り場を手伝いにね」

ヒロが答えた。

それを聞くとボコは、ヒロに忠告をした。

「あそこに居るミツバチたちには十分気をつけるんだよ、あいつらはひどく悪戯好きだから」

「ハッハッハッハッ！私の故郷にも悪戯好きのミツバチたちが居るから慣れっこだよ」

「油断をすると双子たちはロクな事しないから、隙を見せないようにね」

まもなくヒロは、気高い汽笛を鳴らしながら、石切り場に到着した。

石切り場には、フアークアー石切り場から手伝いに来たメービスが居た。

メービスは、ヒロを暖かく出迎えてくれた。

「手伝いに来てくれて嬉しいわ！石切り場にようこそ！」

「私が来たからには安心だ、貨車たちの思い通りにはさせないさ」

双子の機関車のビルとベンは、新しい獲物が来たのでわくわくしていた。

「ねえビル！、新しいカモがやってきたよ？」

「僕達のいたずらで、あの老いぼれを困らせてやろう！」

早速、ヒロは仕事を始めた。

彼のおかげで、仕事が早く終わりそうだ。

しかし、双子の悪戯はやっぱり……てこずるものだった。

ビルが、休憩しているヒロに近づいてきて、慌てたふりをしながら、急かし始めた。

「ヒロ！なんで勝手に休憩してるのさ！？、仕事は終わってないよ！」

「変だな？、私はもう貨車を港の操車場に運んだはずだが……」

「もうひとつ仕事が増えたの！急がないと監督官がかんっかんに怒っちゃう！」

そう言ってビルは、仕事に戻った。

ヒロはなんだか、疑っているようだが……すぐに仕事に戻った。

ところが、仕事に戻してみると、貨車は綺麗に片付いているではないか！。

隣から、ビルがやってきた。

「きゃはははっ！引っかった！引っかった！」

ビルはそう言いながら笑った。

ヒロは一杯食わされた顔をしてしまった。

「なるほど、ボコの言うとおりだ……」

今度は、ベンが悪戯する番だ。

ベンは、ヒロが牽くはずの貨車を勝手に持って行って……別の線へと持って行ってしまった。

ヒロは、何にも知らないまま、陶土を積んだ貨車を牽こうとした。ところが、牽こうとした筈の貨車の姿が消えてしまっているではないか！。

ベンが、クスクス笑いながら貨車を押していた。

これにはさすがのヒロも、ムッとした。

「まったく、あの双子達は……」

「良かったら、あの子たちに仕返ししましょう？。私にいい考えがあるの」

メービスはある事を話すと、ヒロもにんまりした。

ヒロの機関士と助手は監督官と作業員にメービスの作戦を伝えた。

「あの双子たちに悪戯を？よし！一発懲らしめてやるか！」

早速、お返しが実行された。

ビルは今日も、貨車を押していた。

彼は、ヒロの後ろに追突させようと考えていたのだ！

丁度、待避線の所でヒロが貨車を牽く所だった。

「クスクス、貨車を一台増やしちやえ……！」

そうやって、ビルはそろりそろりと……ヒロの後ろに近づく……

1、2、3！の所でビルは思いっきりヒロに突っ込んでいく！。

だが、ヒロはビルがやって来るのに気がついて、さっさと出発してしまった。

ヒロが出発したところをタイミングでポイントが切り替わってしまった。

ビルはそのまま、別の路線へと突っ走ってしまう！。

<ガシャァン！>

「うわぁーッ！？」

いたずらは失敗して、ビルは目を回していた。

ビルが目を回している間に、ヒロは港まで走っていった。

今度は、ベンが悪戯される番となった！。

ベンはまだ、陶土を積んだ貨車を別の線路に移してしまおうとし

ていた。

だが、彼が貨車を移そうとした所を……ヒロがバックしながら、やってきた。

ベンはしまった！と感づいて、早く逃げようとした。

しかし、既にヒロの貨車と連結してしまっているので身動きがとれず……

貨車と一緒に牽かれてしまった。

これはかわいそうな事だが、双子を懲らしめるためには、仕方が無かった。

ヒロはぐんぐんとスピードを上げる。

「わあああゝゝ！！止めて！止めてよゝ！」

ベンは叫んだが、ヒロはまだ走り続ける。

まるで、トーマスがゴードンに仕返しされたのと同じだった。

「どうかね？自分が悪戯されるという気持ちには？」

港に着いたときには、ベンはふらふらで疲れていた。

ヒロがこんなに速いとは、考えてなかったのだ。

その夜、機関庫でビルは、ベンに怒った。

「ベン！君が失敗したせいで仕返しされちゃったじゃないか！」

「僕のせいにならないでよ！元はと言えばビルがしくじったのが悪いだろ！？」

「何だよ！僕のせいだって言いたいのか！？」
「そうだよ！」

二台はとうとう、どっちが悪いかで喧嘩になってしまった。
これを見ていたメービスとヒロは胸が痛くなった。

「なんだか……悪い事しちゃったわ……」
「私も、あまり良い気持ちではないよ……」

ヒロとメービスは、反省した。

翌朝も、最悪な状況だ。

ビルとベンは、お互いに口を聞かないまま貨車を乱暴に押したり牽いたりしていた。

本当は悪戯をしたビルとベンが悪いのに、これじゃあヒロとメービスが悪いようになってしまった。

「何とか、2人を仲良くさせてたいものだが……どうすればいいのか……」

「あんなに貨車を乱暴に扱うと、とんでもないことになるなあ……」

機関士の言うとおりになってしまった。

ビルが、長い行列の貨車をいっぺんに港まで持っていこうとしていた。

この長さだと、ベンと一緒に牽いていったほうがいいのだが……
二台は喧嘩中で、一緒に働く事も嫌になったのだ。

監督が、メービスと一緒に牽くように言ったが、ビルは一人でや

ると言い張った。

メービスは、ビルが無事に走ればとお祈りをする……だが、彼女の願いは貨車たちの機嫌によって打ち砕かれてしまった。

港に行くまでには、長い坂の上を走らなければならない。

だが、長い行列の貨車を牽くためには、機関車が二台必要だった。

……しかし、ビルはそんなことをすっかり忘れてしまっていた。

おまけに貨車たちは、ビルとベンに乱暴にぶつけられた事をまだ怒っていた。

「ビルとベンに仕返ししよう！」

「前々からこいつらには仕返ししてやりたいと思ったぜ！」

貨車たちは、ヒソヒソと耳打ちした。

坂の途中までやっていると、さすがのビルも疲れてきた。

ハアハア喘ぎながら……引っ張っていく……だが、貨車たちはこれを待ち望んでいたのだ！。

「そーれ！ いまだ！」

「引き摺り下ろせええ！！！」

彼らは、合図をしながら後ろに引っ張った。

その反動でビルの車輪が空しく空回りする、でもビルは負けるわけには行かなかった！。

>ガチャン！ ガチャン！<

ところが、トラブルが起きた！。

ビルと貨車たちが引っぱり合いをしている内に……

＞ギギ…ギギギ………ブチン！！＜

連結器が恐ろしい音を立てて、壊れた！。

10台位の貨車たちが、坂を下っていった。だが、その後ろでベンとヒロがやってきてしまった。

ビルの機関士とヒロの機関士は前方から下ってくる貨車に気がつく、ブレーキをかけたが……もう遅かった。

＞ガシャーン！！＜

……幸いにも、けが人は出なかった。
貨車も幸運な事に、全部無事だ。

ビルは慌てて、ベンとヒロに問いかけた。

「2人とも！怪我はない？」

「うん、怪我は無いよ！ビル！」

「私も無事だ。陶土がちょっとかかってしまったが……」

次第に、三人は噴きかけ、笑った。

「「「あははははは！！」」」

「ビルとベン、一緒に港まで行こう！。私が後ろから助けてあげるよ」

「「「ありがとう！」」」

こうして、3台は無事、港まで陶土を運んだ。

ブレンダムの港に着くと、彼らは機関庫に泊まる事になった。
ビルとベンは、すぐに仲良くなった。

「ビル、君のせいにしてごめんね」

「ううん、お互い様だよ……」

「それにヒロ、あんな悪戯をしてごめんね」

「ビル、ベン。私は気にしないさ、私こそ、君たちにあんなことを
してしまってすまない……」

「いいって、メービスと一緒に僕らのためにやったんだろ？」

「？、どうして私がメービスと一緒にと分かったんだい？」

ヒロは、双子に問いかけると……ビルとベンは声を合わせて答えた。

「「そりゃそうだもん！だって僕らは陶土と石を運ぶ仲間だもんね
！」」

このお話の出演は、ボコ、メービス、ビルとベンそして……ヒロでした。

いかがでしたでしょうか？。

今回のお話はかなり苦戦しました、実はあまりヒロのことはよく知りません。

第4長編だけしか見ていませんでしたので、

ヒロのキャラがうまく掴めませんでした(汗)。

ヒロが好きな皆様方に、深くお詫び申し上げます。

今回の話の元ネタは

1889年のイギリス北アイルランド・アーマー州

グレート・ノーザン鉄道にて、

機関車から切り離された客車が坂を逆走し後続列車との衝突事故が元ネタです。

実際は客車の15両が動かないよう処置されていましたが、機関車が発車しようとした際の衝撃で逆走し後ろの機関車と衝突したと言う恐ろしい事故です。

ヒロがベンを繋げたまま走り出した元ネタはきかんしゃトーマス第1話「トーマスとゴードン」が元ネタとなっております。

実際に起きた事件・事故・自分が経験した話なども募集しております。

質問やリクエスト、イラストなども募集しております。

次回のお話はちよつと変わった形をしたことから面白い名前を付けられた機関車のお話、

「ブルマ (Blומר)」をお楽しみに……

第9話：ブルマ　（Bloomer）（前書き）

読者の皆様へ

もうじき12月となりました。

今年もあと一ヶ月で終わりになってしまいます。

さて、そんなソドー鉄道はといいますと……

これは秋の話になります、ソドー島でも巨大野菜コンテストを開く事になりました。

ですが、本線での観光客が多くなってしまいました。

そこでトップハム・ハット卿は新しい機関車を一台入れることにしました。

実はその機関車はとても変わった形をしています：

ゴードンたちは「はしたない機関車だ！」と馬鹿にしますが、
今ではソドー鉄道の仲間として迎え入れてくれました。

第9話：ブルマ（Blומר）

ソドー島は、秋を迎えていた。

夏の暑さはすっかり無くなり、涼しくなってきた。

機関車たちは一生懸命、乗客や物資を運ぶ。

しかし、最近になって観光客が多すぎて忙しくなった。

本線でも、列車がいくらあっても足りないぐらいだった。

そこでトップハム・ハット卿は、新しい機関車を一台入れる事にした。

夕方、トップハム・ハット卿がティッドマウス機関庫にやってきた。

何か、重大な発表があるようだ。

「今度の日曜日にティッドマウス駅で、巨大野菜コンテストを開催する事になった。

優勝者には、野菜を象ったトロフィーを送られる。

腕の見せ所だ。君たちも、是非協力してがんばりたまえ！」

『分かりました！』

機関車たちは元気よく答えた。

するとトップハム・ハット卿は帰る前に、機関車たちに話した。

「ああ、それと……ここ最近、観光客が多くなってきている。

そこで本線に新しい機関車を一台入れる事になった、変わった形をしているが仲良くしてやってくれ。」

「面白い形ってどんなのだろ？」

「どうせディーゼルみたいな奴じゃないのか？」

パーシーの疑問に、ジェームスは嫌々と答えた。

彼はディーゼル機関車が大っ嫌いなのだ。

次の日……新しい機関車がティッドマウス駅で急行を牽きながら止まっていた。

その機関車は本当に変わった形をしている、エミリーのような大きい車輪の下回りが綺麗にむき出しになっているのだ。

丁度、ゴードンがやってきた。

彼は、新しい機関車の姿を見ると嫌な顔をした。

「ぷっはあ！、何だその格好は！？、車輪が丸見えじゃないか！」

それを聞いて、新しい機関車は怒った。

「ひどい！車輪がむき出しになって何が悪いのよ！」

「はしたないんだよ、ちゃんとした機関車はやたら車輪を丸出しにしちゃならない！」

新しい機関車が来るとわくわくしていたが、こんなはしたない機関車を見たのは初めてだ！」

ゴードンはそう答えると、出発した。

機関車は、それを聞いて悲しくなった……自分の姿を否定されるのは嫌だからだ。

「アタシがはしたないなんて……」

車掌が笛を吹くと、彼女は悲しそうに出発した。

> P L L L L L ! ! ! <

まもなく、ウエルズワース駅に着くと、エドワードが居た。

彼女は、またバカにされるのかと思うと、悲しくなった。

でも、エドワードは違う。彼は親切なので、彼女に聞いてみた。

「どうしたんだい？、悲しい事があったの？」

「大きな青い機関車が、アタシの姿がはしたないって言うの……」

機関車がそう言うのと、悲しくなった。

エドワードは優しく微笑んだ。

「気にするなよ！、ゴードンの言った事は酷いけど……僕は君の事をはしたないなんて思わないよ。」

じゃあね、僕もそろそろ行かなくっちゃ！、巨大野菜コンテストに使う木材を運ぶんだ」

機関車は、エドワードの言う事で元気が出てきた。

元気が出てきたところで、出発の時間になり……彼女は出発した。

やがて、ゴードンの丘が見えてきた。

ここは、ゴードンが立ち往生してしまった丘だ、長い列車を牽い

ているときにはここでブレーキをかけなければならない。

トップハム・ハット卿からそう言われて、機関士はブレーキを掛けた。

「はあ……はあ……なんて丘なの……」

機関車はハアハアあえぎながら、丘を登った。

こんな丘を登ったことは初めてなのだ。

マロン駅に着くと、彼女はヘンリーと交代することになっていた。客車を切り離すと、機関車は待避線で水を補給する事にした。

ヘンリーが客車を連結しに来ると、彼女の姿を見て、やはりバカにした。

「はしたない奴だなあ！、そんな格好で走るんじゃないよ！お客の中には子供達が居るんだぞ！？」

ちゃんと弁えろ！」

「いいのよ！どんな格好していてもアタシはアタシなのよ！」

ヘンリーにそう言い返すと、彼女は睨んだ。

言い返されたヘンリーはちよつと戸惑ってしまい、さっさと出発した。

水を補給し終わると、彼女はナップフォード駅まで貨車を入れ替えに戻っていく。

ナップフォード駅に戻る途中で子供達が彼女の姿を見て指を刺し

ながら笑っていた。

「はしたない機関車だ！」

「あははは！ かつこ悪い！」

子供達の言う事も、機関車は気にしなかった。

それに、走ってる最中に色んな機関車たちが挨拶を交わしてくるし、風に乗って走るのは気持ちいいからだ。

機関車は初めて、ソドー鉄道に来てよかったと、思った。

ナップフォード駅で貨車の入れ替えをやっているときに、ジェームスがやってきた。

やっぱり、彼も機関車の姿を見て失礼な事を言った。

「うわー！ はしたない奴だあ！」

でも、彼女はそんな事気にしなかった。

ジェームスの隣で止まっていたエミリーはジェームスに厳しく言った。

「人の姿を見て失礼な事を言うのは良くないわよ！」

「ふんだっ！ 車輪の下回りがむき出しになっている機関車ははしたないんだ！」

ジェームスは反省の色も出さずに、貨車を牽いて走り去っていった。

エミリーは新しい機関車を励ました。

「ごめんなさい、ジェームスがひどいことを言って……」

大型機関車は威張ってばかりだけど本当は良い人たちなの」

エミリーはそう言うのと巨大野菜コンテストに使う材料を積んだ貨車を運んで、ティッドマウス駅まで、戻っていった。

機関車はエミリーが運んでいる野菜を見て、嬉しいような悲しいような顔をした。

「みんなも巨大野菜コンテストの準備しているのね、私も見たいなあ」

でも、今は仕事をしなければならぬ。

機関車は早速仕事に戻った。

一方、ゴードンはマロン駅でお茶の時間を終えて、本土まで出発した。

「ハハハハハッ！！俺はソドー島で……いや、世界一速い機関車だ！この俺のすっ飛ばような走りを見てくれえ！、急げや急げ！急げや急げえ！」

ゴードンは調子に乗った。

しかし、トラブルが起きてしまった！。クロンク橋の途中で急にゴードンのランボードからきしむ音が聞こえてきた。

>メキメキメキッ！バキバキバキッ！！<

「ぬぅううう！！……いたっ、いたたたたたた！！。と、止めてくれえ！バラバラになっちまうう！！」

機関士が急ブレーキを掛けた。

ゴードンは苦しそうな表情を出しながら、止まった。

機関士と助手と車掌が、ゴードンのランボードを調べた。

「ランボードにヒビが入ってるぞ、これはとてもじゃないが走れないな……」

「なあんてこったあ！、俺の最速のスピードはこのヒビで終わっちゃうのか！？」

「バカなことを言うんじゃない！。それより、助けを呼ぼう」

機関士はクロンク駅まで走って行った。

クロンク駅に到着して、ゴードンの機関士はすぐにトップハム・ハット卿に電話をした。

トップハム・ハット卿が、書類を整理してミルクティーを飲んで
いるときに……

電話が入った。

「今朝、到着した新しい機関車を呼ぼう！。ベアーはゴードンを修理工場まで引っ張ってもらおう」

ナップフォードの駅長が、新しい機関車の機関士にゴードンの事故を連絡した。

「あら、威張り屋の坊やを助けないとね、クスクス」

彼女はクスクスと笑いながら、ベアーと一緒に橋まで救助向かった。

橋の途中まで来ると、ゴードンは彼女と目を合わせないようにしていた。

しかし、機関車はゴードンを見ると、ベアーに話しかけた。

「ねえベアー、この青い機関車は誰かしら？」

「誰って、ゴードンだよ。分からないかい？」

ベアーが答えた。

「へえ？、ゴードンって確かちゃんとした機関車じゃなかったかしら？」

ちゃんとした機関車なら、こんなところで止まったりするはずないわねえ？」

「フンッ！」

ゴードンは、顔を赤くして…何も言わなかった。

「まあまあ、そんな事を言うのはゴードンも可愛そうだよ。

さあ、ゴードン。君を修理工場まで引っ張っていくよ」

そう言うと、ゴードンは客車から切り離され、ベアーはゴードンを修理工場まで引っ張っていった。

切り離された列車は、新しい機関車が受け持つ事になった。

>POOP!POOP!!<

「遅くなりました、ただいまクロンク駅へバロー・イン・ファーン
ス間まで出発いたします。

お荷物のお忘れの無いようご注意くださいませう！」

彼女は汽笛を鳴らすと、シュツシュツと蒸気を上げて急行を引
張った。

「急げや急げうう！！！」

彼女はゴードンの口調を真似をして、突っ走った。

新しい機関車を見に行こうとしている人たちが、彼女の美しい真
紅の塗装や……

金色のドームと煙突のキャップの美しさに見とれてしまった。

機関車のスピードは段々と速くなっていく。

乗客は大喜びだ、大興奮だった。

無事にプラットホームに滑り込んだ。

乗客たちは新しい機関車や機関士と助手にありがとうとお礼を言
った。

でも、当の彼女は疲れきっていた。

「ふう……こんなに長い急行を引っ張ったのははじめてよ……」

機関車はへとへとになりながら、そう言った。

そして、次の日の日曜日。

いよいよ、ティッドマウス駅で巨大野菜コンテストが開かれた。

機関車たちは、色々な人たちが、自分の庭で作った大きな野菜を持ってくるのを眺めていた。

誰が優勝するのか、わくわくしていた。

その頃、新しい機関車は本土からティッドマウス駅に帰るところだった。

丁度、コンテストが始った時間になっている。

彼女は急いでティッドマウス駅まで走った。

だが、機関士が宥めた。

「落ち着けよ！そんなに急がなくてもコンテストに間に合うから！」

その時だ！。

一人の農夫が、赤い布を振りながら大声で叫んでいるのが見えた。機関士がそれに気づいて、ブレーキを掛けて停車した。

「荷車が壊れちゃったんだ、ティッドマウス駅までこのカブを運ぶたいのに運が悪いよ。」

申し訳ないけど……ティッドマウス駅まで乗せてってもらえないか？」

「ええ、いいですとも！」

機関士はそう言うと、農夫と巨大なカブを乗せた。

「さあ！行くわよ！、大事なカブを落とさないでね！」

そして、美しい真紅の機関車は……ティッドマウス駅まで突っ走った。

彼女たちがティッドマウス駅に着いたのは丁度、後半戦のところだった。

農夫はお礼を言うと、急いで、大きなカブをコンテストに出した。

「フフツ…優勝はきつとあの人ね」

コンテストが終わりの頃、ついに審査発表が開始された。
優勝者はもちろん、あの大きなカブを持ってきた農夫だ。
トップハム・ハット卿が農夫の手を取った。

「優勝おめでとうございます、トロフィーはあなたにお送りいたします」

「いえ、トロフィーは私ではなく……あの真紅の機関車にトロフィー送ってください。」

ブルマが居なかったら、私はコンテストに出れませんでした」

その時、彼女は農夫の言葉に反応した。

「あの、「ブルマ」って……私の事ですか？」

「ハハハハッ！、そのとおりだよブルマ！」

君のスタイルは速くて動きやすそうな形だからね」

「ふむ…ブルマねえ、その名前良いですな……」

トップハム・ハット卿は、農夫と話し合い……新しい機関車に話しかけた。

「お前の名前をどうすればいいか悩んでいたが、この農夫さんがお前を「ブルマ」と名づけたいのだがどうかね？」

「ええ！お願いいたしますわ！！」

新しい機関車は大喜びで、答えた。

他の機関車たちは、優勝した農夫と真紅の機関車を称えるように汽笛で合唱をした。

まもなく、新しい機関車の名前は「ブルマ」と名づけられた。

でも、ブルマはトロフィーを受け取らずにあの農夫に譲ったのだ、機関車にトロフィーはいらないからね。

代わりに……炭水車に番号の12番を付けられ、ボディには名札を付けられた。

ブルマはこうして、ソドー鉄道の一員となった。

そして、エドワードとエミリーとは友達になった。

だけど、ゴードンとヘンリー、ジェームスはその名前や彼女の姿を見てバカにするが……

彼らも、本当は彼女がソドー鉄道の一員になった事を暖かく出迎えてくれた。

ブルマは、ソドー鉄道にやってきて本当に良かったと思った。

「ソドー鉄道って本当に素敵な鉄道だわ！」

ブルマは、幸せそうに微笑んだ。

このお話の出演は、パーシー、ゴードン、ジェームス、ヘンリー、エドワード、

ス、
ベアー（クラス7101）、エミリー、トーマ

トビー、ダック、オリバーそして……ブルマで
した。

第9話：ブルマ（Bloomer）（後書き）

いかがでしたか？。

今回のお話はブルマと言う機関車のお話です。

「そんな変態な名前の機関車があるか！」と思う読者もごさいますが……

ここで解説をします。

「ブルーマー」と言うあだ名の機関車は実際に居ます。名前の由来はアメリカの「ブルーマー女史」からです。ブルマというのは……まあ、あのズボンですのでお察しください；

今回のお話の事故の元ネタは

今年の7月にフライング・スコッツマンが6月末に台枠にヒビが見つかったという事件を基にして書きました。

実際は：検査中にヒビが発見されたのですが：（汗）

実際に起きた事件・事故・自分が経験した話なども募集しております。

質問やリクエスト、イラストなども募集しております。

ここはとある収録スタジオ。

ある男のナレーションの収録を行っていた。

それは、「きかんしゃトーマス」の

新たなお話を吹き替え収録しているのである。

トーマスのナレーターである森本レオは、

ラストの紹介をナレーションしていた。

森本レオさん

「このお話の出演は、トーマス、ユキカゼ、

つばめ、奈々そして……ゆかりでした。
やあ、みんな。今度のトーマスのお話は、
とっても驚くよ？。ちょっとだけ見てみよう！」

次のきかんしゃトーマスのお話は、
なんと！トーマスがソドー島を離れて、日本にやってくるよ。
トップハム・ハット卿が、日本の梅小路蒸気機関車館の
館長さんから「日本の子供たちにソドー島の機関車に
会いたがっているので日本に来てほしい」
と言う手紙をもらい……

トーマスを日本に行かせることにしたんだ。
でも、みんなはトーマスが日本の線路を走れないと
心配しているけど、大丈夫！。

日本に着いたトーマスは、
早速工場で、日本に居る間に車輪軸を改造してもらったよ。
これなら、トーマスも日本の線路を走れる。

……おっと、新しいお話と言えば、
新しい仲間たちの事も気になるよね？。

トーマスを運んでいるのは、セミトレーラーの「武^{たけし}」。
力強くて大きなトラックだ。
でも、何かトラブルが起こってしまったけど、
トーマスは大丈夫かな？…………。

この機関車は、トーマスと同じくイギリス生まれで、
タンク機関車に生まれ変わった1070形「ネルソン」

鉱山で石灰やドロマイトを運んだんだよ。

アレアレ？機関庫でぐっすり寝ているのは、誰だろう？。

彼は、日本で最初に量産された9600形蒸気機関車の「あき」。

石炭を炭水車に入れているのは、
フォークリフトの「ガクシヨク」。

彼は、トーマスたちのように顔は無いけど、
スピーカーでおしゃべりができる。

だけどこの名前は機関車たちから付けられたあだ名で、
本当の名前の事は知らないんだ。

彼女はC62形2号蒸気機関車「つばめ」

東海道本線や山陽本線などで活躍し、とっても速い機関車だ。
除煙板にツバメのマークが付いてて、かっこいいねえ。

おや？トーマスと一緒に居る機関車たち、かなり小さいね？。

他の機関車たちより小さくて、双子の女の子タンク機関車の

「ゆかり」と「奈々」。

元気いっぱい、明るいのが「ゆかり」：

そして、恥ずかしがり屋で内気な「奈々」。

2人とも、とっても可愛いね。

他にも、梅小路には沢山の機関車がいっぱいだ。

SLスチーム号を引くトーマスも、見られるよ。

森本レオさん

「……いやあ、トーマスは日本でどんな大活躍するんだろうね？。
それは読んでからのお楽しみ。」

トーマスが日本に行くお話は、第10話から連載するよ。
絶対みんな読んでね」

さあ、いよいよ待ちに待った第10話目！

なんとトーマスが日本の梅小路まで行く事に！？

「トーマス、にほんへいく　　It Goes To Japan
Thomas」を

お楽しみに！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5091r/>

きかんしゃトーマスとなかまたち ～Thomas The Tank Engine

2011年12月2日20時47分発行